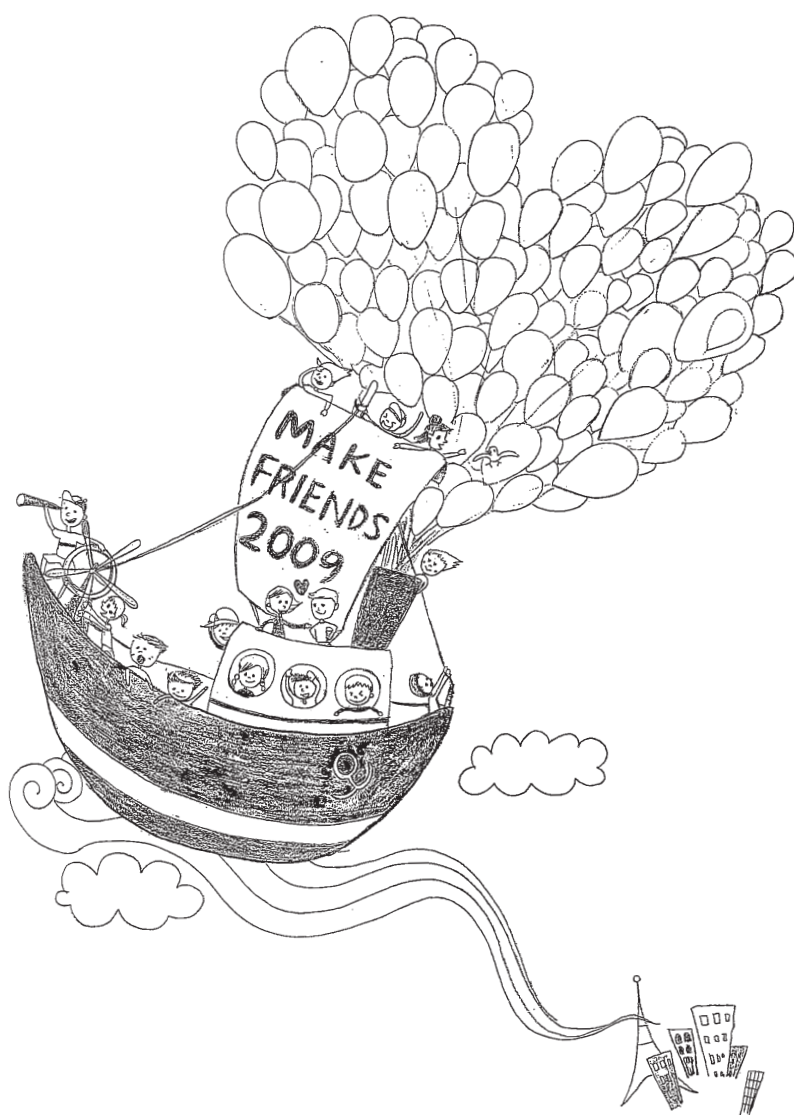


2009（平成21）年度
熊本大学教育学部フレンドシップ事業

実施・成果報告書



熊本大学教育学部
附属教育実践総合センター

2010（平成22）年3月

目 次

はじめに

- 1 平成21年度フレンドシップ事業シンポジウム ご挨拶
..... 熊本大学教育学部長 辻 野 智 二 1
- 2 フレンドシップの“筋肉運動”(09年度)
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長 吉 田 道 雄 2

I メイクフレンズ活動の実施報告

- 1 メイクフレンズについて 5
- 2 2009(平成21)年度メイクフレンズ活動体系について
..... 熊本大学教育学部2年 勝間田 あぐり 6
資料 2009年度熊本大学メイクフレンズ学生名簿 7
- 3 2009年度メイクフレンズ年間活動一覧 9
- 4 2009年度メイクフレンズ外部依頼による活動一覧 12
 - (1) 大江班活動報告書
 - (2) 五福班活動報告書
 - (3) 託麻班活動報告書
 - (4) 中央班活動報告書
 - (5) 龍田班活動報告書
- 5 熊本大学フレンドシップ事業シンポジウム・分科会開催要項 17

II 分科会の実施報告

- 1 メイクフレンズ学生自主企画分科会 21
- 2 実施計画 23
- 3 学生自主企画分科会の事後アンケート結果 30

III フレンドシップ事業のまとめと課題

- 1 メイフレ自己ベストの更新
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 中 山 玄 三 47
- 2 平成21年度フレンドシップ事業公開シンポジウムに参加して
ー進化したフレンドシップ活動ー
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 高 原 朗 子 48
- 3 瑠璃の光も磨きから
..... 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 馬 場 啓 夫 49

平成21年度フレンドシップ事業シンポジウム

ご挨拶

熊本大学教育学部長 辻野 智 二

ご紹介を頂きました教育学部長の辻野でございます。平成21年度フレンドシップ事業シンポジウムの開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

フレンドシップ事業は、教員を目指す学生の方々が、地域の子どもたちとの触れ合いを基軸とする様々な体験的活動を通して、実践的な指導力の基礎を身につけてもらうことを目的とする教育活動でございます。教育学部には、いくつかの実践的・体験的学習プログラムを用意しておりますが、その中でも、当フレンドシップ事業は、教職に関する主要な専門科目として位置づけられている授業科目でもございます。

今年度メイク・フレンズとして参加しておられる学生の皆さんは、毎週水曜日の18:00から、定例会を設けて、各班で取り組む活動の企画・運営・準備等を自主的に行ってきたと伺っておりますが、本日は、その成果報告などについてご発表して頂くことになっております。この事業は、熊本市公民館を活動の拠点とさせて頂いております。公民館の社教主事の先生方には、多々ご助言、ご指導を頂いてまいりましたこと、改めて感謝を申し上げる次第でございます。また、本日は、連携協力機関関係者として、熊本県生涯学習審議員の山平先生始め3名の先生方に、今年度の活動に対するコメントも頂くことになっております。先生方、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

また、本日は、熊本県教育庁社会教育課長の小野先生にお越し頂きまして、特別講演をして頂くことになっております。小野先生、どうぞよろしくお願い致します。

昨年の民主党政権への移行とも関連しまして、昨今、教員の資質向上方策の抜本的な見直しが行われております。検討すべき課題がいくつか指摘されてございますが、我々教員養成学部には、新たな教員養成カリキュラムの開発・提起が求められているところでございます。教員に求められる真の意味での実践的指導力とは何か、ということを深く問い直すと共に、そのための系統的な教育課程と価値ある学習プログラムの創出をしていきたいと考えているところでございます。そのような観点からも、地域の教育力を活用させて頂いておりますこのフレンドシップ事業の教育活動をさらに充実・発展させていくことが重要であると思っております。

本日、大変ご多用のところご参加頂きました先生方に重ねて御礼申し上げますと共に、学生の皆さんと有意義なシンポジウムをお作り頂きますこと祈念申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

フレンドシップの“筋肉運動”（09年度）

教育実践総合センター長 吉田道雄

冒頭からまことに残念なご報告をしなければなりません。教育実践総合センター長としてフレンドシップ事業の強力なサポーターでいらっしゃった木村正治先生が、12月25日に急逝されました。こころからご冥福をお祈りするとともに、先生のエネルギーを引き継いで、メイクフレンズの大いなる飛躍を誓いたいと思います。

さて、入院してベッドに寝たままだと筋力は急速に衰えると言われます。病気であればそれもやむを得ませんが、健康を維持するためには日ごろから運動を心がけることが大事です。じつは、メイクフレンズの皆さんにとって、子どもとの人間関係づくりについてもまったく同じことが言えます。いま自分が持っている力を維持するためにはきちんと「運動」しなければなりません。もちろん「現状維持」を目指すのであれば、運動もそこそこでいいでしょう。しかし、さらに積極的に健康を増進したいと考えるなら、もう少し腰を入れて「トレーニング」をすることになります。たとえばジョギングやランニングをはじめ、プールに出かけて泳ぐといったことが頭に浮かびます。人によってはジムに行ってトレーニングマシンにチャレンジするかもしれません。健康の増進という点では共通していますが、どんな運動をするかは個々人で違っていても構わないのです。大事なことは、自分の目的に応じた運動をコツコツと続けることです。子どもとの人間関係の場合も、まずは「しっかり子どもとの関係を改善・向上させよう」と心に決めることからトレーニングが始まります。その内容がどんなものになるかは、一人ひとりの目標や置かれた状況によって違ってきます。

自分にあったメニューを決めて地道に運動を続けていけば、それなりに筋肉も付いてきます。努力の成果が目に見えるのです。周りの人たちからも「このごろたくましくなったね」といってほめられるかもしれません。人間関係の力を付けるための「筋肉運動」も同じような成果が得られるはずです。「子どもとコミュニケーションをうまく取れるようになりましたね」「あなたの話を聞いて子どもがやる気を出してますね」。公民館の先生方やメイクフレンズの仲間たちからこんな声をかけられるようになる。トレーニングの成果が目に見えはじめたのです。「やったあ」と叫びたくなるほど嬉しくなるでしょう。リーダーシップの「筋肉トレーニング」を実行した甲斐があるというものです。

ところで、「筋肉トレーニング」は継続することが不可欠です。せっかく身に付いた筋肉も、運動をサボればあっという間に衰えます。とくに対人関係の力については、トレーニングに終りはありません。あえて終りというのであれば、それは私たちが人と関わらなくなったときでしょう。その意味で、人間関係力を身に付ける努力は「生涯学習」なのです。いずれにしても、人間関係は「トレーニング」で鍛えることができます。はじめから「私はリーダーに向いていない」とか、「対人関係は苦手だ」などと逃げてはいけません。

I. メイクフレンズ活動の実施報告

メイクフレンズについて

全国国立大学教育学部において文部科学省が推進している「フレンドシップ事業」は、さまざまな体験活動を子どもたちと学生がともにおこない、ふれあう中で、子どもたちの気持ちや行動を理解し、実践的な指導力の基礎を身につけることをねらいとした事業です。

メイクフレンズは、この「フレンドシップ事業」の一環として行われた熊本大学教育学部の授業から発展した、教育学部の公認サークルです。メイクフレンズでは、学生が活動を企画・実践し、そこでの体験を振り返ることによって、「子どもを見る目」及び「子どもの考えや行動を予測した企画」のレベル向上を目的としています。

現在は活動の場として、熊本市の大江公民館、五福公民館、託麻公民館、中央公民館、龍田公民館などの社会教育施設にご協力いただき、企画・運営を含めた大学外での体験活動をおこなっています。

2009（平成21）年度メイクフレンズ活動体系について

熊本大学教育学部2年 勝間田 あぐり

今年度は熊本市の5つの公民館と提携させていただき、5班構成で活動を行ってきた。そのうちの2班は、年間を通して特定の子どもたちと共に活動の企画・運営をするプランナー班として、3班は学生主体で活動を企画・運営する単発班として活動させていただいた。今年度の活動は、「はじめてのおかいもの」などの伝統的な活動に加え、子どもたちの創造力をいかした調理活動が盛んであった。また、科学と遊びをテーマにしたホール開放事業や、自然や動物と親しむことを重視した企画もあり、各班充実した活動ができたことと思う。

メイクフレンズでは、「子ども理解」を軸として、子どもたちの言動から気持ちをくみ取る目的で、各活動での子どもの様子についてのエピソードを振り返る時間を大切にしている。そして今年度は、「受信→発信→成長」をテーマに、子どもたちとの触れ合いの中で感じた喜びや新たな気づき、不安や悩みなどを共有し、「子ども理解」をより深めていきたいと考えている。そのためにも、毎週の定例会では、学年や班に関係なく意見交換がしやすい環境づくりを心がけ、全体としてのさらなるレベルアップを目指している。これからも、企画→実践→振り返りを繰り返しながら、学校や家庭では味わえない、メイクフレンズだからこそできる活動を追求していきたい。

メイクフレンズは来年度で11年目を迎える。この10年間を通して受け継がれてきた「子どもとじっくり向き合う姿勢」は、わたしたちが引き継いでいかなければならないもののひとつであり、メイクフレンズの良さでもある。子どもの立場に立ち、子ども一人一人に寄り添おうとする姿勢は、子どもたちと接する者ならば、必ず身につけておきたいものである。このような貴重な体験ができるのも、活動で出会った子どもたち、その保護者の方々、そしてメイクフレンズを支えてくださる全ての方々のおかげであることをしっかりと心にとめて、一つ一つの活動を大切に、そして私たち自身も楽しんで活動していきたい。

最後になりましたが、いつもメイクフレンズへのご理解と多大なご支援をしてくださる、各公民館の先生方、連携協力機関の方々、そして吉田先生、馬場先生をはじめとする教育学部の先生方に感謝申し上げます。これからもご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

2009年度 メイクフレンズ 年間活動一覧

月	日	託 麻	五 福	中 央	大 江	龍 田
5月	16日 (土)		科学のひろば 新スライム体験			
	6日 (土)					開講式
	13日 (土)					
6月	14日 (日)					プランナー楽宿
	20日 (土)		遊びのひろば 巨大すごろく	お見知り会		プランナー会議
	21日 (日)	はじめてのおかいもの				
	27日 (土)				絵本の中のお菓子屋さん	
	28日 (日)			金峰山合宿		
7月	4日 (土)					プランナー会議
	18日 (土)		科学のひろば 空気之力	プランナー会議		プランナー会議
	1日 (土)			プランナー会議		プランナー会議
	18日 (火)					プランナー会議
8月	20日 (木)					
	21日 (金)					芦北キャンプ
	22日 (土)		小さなパティシエのお菓子 な家	プランナー会議		
	26日 (火)			阿蘇サマーキャンプ		
	27日 (水)					
	30日 (日)			こどもフェスティバル		
9月	5日 (土)			学生企画		プランナー会議
	6日 (日)				ナイトハイク	
	19日 (土)	Haiiking Walking Making	遊びのひろば 忍者体験	プランナー会議		プランナー会議

月	日	託 麻	五 福	中 央	大 江	龍 田
10月	3日(土)			プランナー会議		プランナー会議
	17日(土)		科学のひろば 音で遊ぼう	プランナー会議		プランナー会議
11月	31日(土)					プランナー会議
	1日(日)			お楽しみ会		
	7日(土)			学生企画		プランナー会議
	8日(日)		浪漫フェスタ			
	21日(土)		遊びの広場 海賊ごっこ	プランナー会議		プランナー会議
	28日(土)					パンの家づくり
12月	5日(土)			プランナー会議		プランナー会議
	6日(日)	はじめのおかいもの				
	19日(土)		科学のひろば 静電気体験	プランナー会議		プランナー会議
	20日(日)				お正月を作って食べて遊ん じゃお	
1月	16日(土)		遊びのひろば 新聞紙で遊ぼう	プランナー会議		プランナー会議
	17日(日)					火起こし体験in菊池
	23日(土)			阿蘇カドリー・ドミニオン バスツアー2010		
	30日(土)					閉講式
2月	11日(木)			閉講式		
	27日(土)		世界の料理ショー			
3月	20日(土)				ぐるっと熊本謎解き探検隊	
	21日(日)	廃校キャンプ				

2009年度 メイクフレンズ外部依頼による活動一覧

月	日	依頼主	活動内容	活動場所
5月	16日(土)	熊本市教育委員会	楠3・5町内子ども会 お見知り会	楠小学校体育館
	17日(日)	熊本市教育委員会	長嶺小学校区8町内子ども会 新入生歓迎会	長嶺公園
6月	21日(日)	IOEコミネット協会	あさざり町通学合宿 ～27日(土)	
7月	19日(日)	熊本市教育委員会	御幸西子ども会 夏のレクリエーション	御幸小学校体育館
8月	21日(金)	熊本市教育委員会	金峰山～大観峰チャレンジキャンプ ～24日(月)	金峰山少年自然の家、あそ教育キャンプ場
9月	12日(土)	熊本市教育委員会	ろう城体験 ～13日(日)	
	29日(火)	IOEコミネット協会	須恵宿泊登校 ～4日(日)	
10月	17日(土)	秋津公民館	プランナー合宿 ～18日(日)	
	27日(火)	IOEコミネット協会	天草しんわ通学合宿 ～31日(土)	
11月	8日(日)	五福公民館	五福浪漫フェスタ	五福公民館
1月	23日(土)	熊本市教育委員会	生涯学習フェスティバル	パレア
3月	14日(日)	熊本市教育委員会	帯山小学校区3町内子ども会 お別れ会	帯山地域コミュニケーションセンター

2009年度 大江班活動報告書

<前期を振り返って>

班長 2年 杉尾望帆

前期大江班を始動するにあたって、どんな班にしたいか、どんな活動をしたいか何度も話し合った。その結果、「子どもたちが今までに学校や家庭で経験したことがないこと、これから先も経験できないようなことを今、公民館で大江班の活動で体験させたい」という思いに辿り着いた。そこで、前期はこの思いを中心として企画をしていくことに決めた。

第1回目の活動では、小学校2・3年生を対象に「絵本の中のお菓子屋さん」を行った。この企画は子どもたちに大人気の絵本『ぐりとぐら』のストーリーに合わせて、みんなで台詞を読んだり歌を歌ったり、ゲームをしたりと盛り沢山の活動になった。そして、活動の最後には、とてもおいしいような黄色い“かすてら”が完成した。子どもたちができあがった“かすてら”を試食して、「ぐりとぐらが作ったのよりおいしい“かすてら”作れたね」と笑顔で言ってくれたことが印象的であった。

第2回目の活動では、小学校4～6年生を対象に「ナイトハイク」を行った。ナイトハイクとは言っても、ただのナイトハイクではない。瀬田駅から大江公民館まで25kmの道のりを夜通し歩くのだ。学生でさえフラフラになった25km、果たして子どもたちは完歩することはできるのかと不安になった。しかし、私が考えていたよりも子どもたちはずっと強かった。眠い目を擦りながら、痛い足で一步一步地面を踏み締めながらゴールに向かっていく姿は逞しく、感動を与えてくれた。

前期の活動を通して、子どもたちの笑顔や強さには何度も励まされた。確かに、1つの企画を作り上げていくことは簡単なことではない。しかし、その企画を楽しみに待っていてくれる子どもたちがいる限り、どんな困難にも挑戦していきたいと思った。

<後期を振り返って>

班長 1年 平位和久

後期大江班では12月に「お正月を作って食べて遊んじゃお!」という活動を行い、3月後半に「ぐるっと熊本謎解き探検隊(仮)」を行う予定である。

12月の活動では、今の子どもたちはお正月を感じる機会が少なくなっているのではないかと考え、「子どもたちが日本のお正月について学び、これからのお正月を楽しみにすること」を目的にして活動を進めた。この目的を軸に、レクリエーションや調理レシピを考える際、どのようにすれば子どもたちが楽しみながらお正月の知識を学びとれるかということ、子どもたちの目線に立って考えることを意識し、企画を進めた。

活動当日、調理では子ども達を作ったことがない、また、由来がある料理ということで伊達巻、お雑煮を作った。子ども達は初めて作る料理に、レシピを見ながら悪戦苦闘していたが、伊達巻を巻きながら興奮する子ども、学生が使用する食材等の由来を説明するのを興味深そうに聞く子どもたちの姿が見られた。

レクリエーションでは、お正月に遊ぶ機会が減少したであろう福笑いとカルタを遊び本来の楽しみに加え、お正月の知識を学んでもらうことを目的に行った。子ども達は楽しそうにレクリエーションに参加していたが、お正月の知識の説明には退屈そうであり、一見興味がなさそうにも見えた。もっと子ども達の興味・関心を引き立てる工夫が必要だと感じた。

最後に子どもたち自身に住所を記入してもらい、芋スタンプを用いたオリジナルの年賀状作りを行った。子ども達は一生懸命にスタンプ作りをし、自分で作ったオリジナルスタンプを嬉しそうに押している姿が見られた。

一日の活動を子どもたちに振り返ってもらおうと、「今日作ったものをまた作りたい」「お正月に今日したことをしたい」とあり、自分達が目的としていたものが達成された部分はあったと感じた。しかし、子どもたちが、活動を通してお正月を感じている姿はあまり見受けられなかった。また、事前に予想し対策していたが、調理中に軽い火傷、レクリエーション中に子ども同士が衝突する場面があり、危機管理に対する認識が甘かったと痛感した。

子どもの目線に立った活動の内容や危険性を考えることの重要性を、活動を通して学んだ。次の活動ではもちろん、これからの活動でもより意識していきたい。

2009年度 五福班活動報告書

〈前期を振り返って〉

班長 3年 平 坂 千 明

前期五福班では「サタデーワンダーホール」を4回と、単発の「小さなパティシエのお菓子な家～お菓子の家を作って食べよう～」を企画・運営させていただいた。「科学の広場」では、科学的な体験を通して科学のおもしろさを感じてもらおうという目的のもと「スライム作り」「ミニホバークラフトと空気砲作り」を、異学年間の交流を目的とした「遊びの広場」では「巨大すごろく」「わくわく忍者体験」を実施した。どれも前年度の反省を活かして班員でアイデアを出し合いながら作り上げた活動で、とても思い入れの深いものになった。

単発の「お菓子の家作り」は、私にとって最も印象深い。普段家や学校でできないことを子どもたちに体験してもらいたいという願いのもと企画をしたのだが、実はお菓子の家作りというのは私を含め学生の夢でもあったからだ。子どもたちは自分たちでお菓子の家の設計図を書き、スポンジや生クリーム、いろいろなお菓子を駆使して立派に家を作り上げることができた。出来上がったお菓子の家を笑顔でほおぼる子どもたちの姿はとてもほほえましいものだった。ある子どもが「お菓子の家を作るなんて無理だと思っていたけど、本当にできたからすごく嬉しかった」と感想を言ってくれた。その時今までの努力が報われたような気がした。子どもたちを通して私たちの夢もかなった活動だった。しかし反省点もあった。調理前のレクレーションを時間の関係上省いたため、うまく班になじめない子どもが出てしまったのだ。こちらの都合を優先して子どもの目線から考えることができなかった。とても悔しいことだったが、この反省のおかげで常に子どもの視点から考えることや、子どもを理解することの大切さに改めて気づくことができた。後期は「子どもを中心に考える」という姿勢を意識して活動に取り組んでいる。このようにひとつの活動で学ぶことはたくさんある。これからも反省を活かしながら活動を重ね、子どもたちを理解するために邁進していきたい。

〈後期を振り返って〉

班長 1年 米 岡 有 紀

私は、後期の五福班の班長として、前期と同様に「科学の広場」「遊びの広場」というホールでの活動の企画をした。科学の不思議さを実感してもらうための「科学の広場」では、「糸電話づくり」と「静電気で遊ぼう」、コミュニケーション能力を培ってもらうための「遊びの広場」では、「海賊ごっこ」と「新聞紙で遊ぼう」を実施した。また、2月27日では「世界の料理ショー！～世界の料理を作って食べよう～」と題して、世界の国々の料理を作ったり、遊びやクイズをしたりする活動を行う。

五福班の活動は、ホールでの活動が月に1回あるので、子どもたちと接する機会が多く、充実したものだったが、班長として企画全体をまとめたり、活動の進行を監督したりするなどの事務的な作業も多く、活動をこなすことで精一杯になってしまい、私の中で「子どもが主役」であることを見失いがちになったこともあった。しかし、最後の単発活動の企画に入るときに、先輩から「企画段階で子どものことをよく考えてあげることが大切」というお話を聞き、今まで以上に「子どもが主役のメイクフレンズ」だと考えるようになった。そのことによって、再度目的に時間をかけて考えたり、内容を再検討したりするなど、子どものことを考えて企画を進めることができた。

最後に何よりも活動の企画・準備をここまで進めることができたのは、五福班員の協力と、公民館の先生方のご理解・ご支援のお陰である。これからも、周囲の方々に感謝の気持ちを持ち、子どもたちが楽しんでくれる活動を作り上げて行きたい。

2009年度 託麻班活動報告書

〈前期を振り返って〉

班長 2年 中 島 健 陽

前期託麻班では、「はじめてのおかいもの」と「Hiking Walking Making」の2つの活動をさせて頂いた。

9月には、御船にある“森の遊園地”で「Hiking Walking Making」というデイキャンプを行った。この活動では、「自然の様々な良さを見つけて、発見を班で共有しよう！！協力しよう！！」を目的に掲げ、旗作りやウォークラリー、うちわ作りを行った。また、“森の遊園地”とは言っても、そこには遊具はなく、子どもたちにいかに遊園地に来たことを実感させるかが課題となった。そこで、“森の遊園地”の入口に入場門を設置したり、チケットを作ったり様々な工夫を行った。子どもたちは少しでも遊園地の雰囲気を味わうことができたのではないかと思う。

特に印象に残ったプログラムは、うちわ作りである。ウォークラリーで拾った葉っぱや小枝、仲間からのメッセージを貼って、世界に1つだけのうちわを作ることができた。例えば、枝を使って作った文字で装飾したり、どんぐりと葉っぱで顔を作ったりと子どもたちは発想力がとても豊かで、完成したうちわの素晴らしさには驚いた。

この活動を通して、子どもたちがやりたいと思える活動を子どもの目線に立って考えることの大切さを改めて感じた。

〈後期を振り返って〉

班長 1年 代 口 成 也

後期託麻班では、12月6日に行われた「はじめてのおかいもの」3月30日から21日にかけて「ドキドキ廃校ワクワクキャンプ」と題して「廃校キャンプ」を企画している。

「はじめてのおかいもの」では「初めてのことを学んで、次につなげよう」という目的を持って活動した。子どもたちが今回学んだことを家庭や学校で実践してくれるようにと参加賞にレシピを入れたり、家庭にある調理器具を使ったりと工夫をした。その結果子どもから「レシピがほしい」という声が聞けたり、感想シートに「家でやってみる」と書いてあったりと、嬉しいことが多かった。

その反面、学生どうしの意識統一が為されていなかったり、危機管理の徹底が為されていなかったりと、反省点も多い活動であった。

前回の反省を活かし、今企画を練っている「ドキドキ廃校ワクワクキャンプ」では、大きな目的として「協力」を掲げ、子どもたちにキャンプならではの楽しさを感じてもらいたいと思っている。そのために学生同士の協力体制を密にするとともに、子どもの視点に立った企画を作り上げたい。

2009年度 中央班活動報告書

〈前期を振り返って〉

班長 2年 姫野 祐輝

前期中央班では、小学5年生の3人のプランナーとともに「中央ネクサスチャレンジャー2009」として、「金峰山プランナー合宿」「夏キャンプ」の二つの活動を中心に行った。私たちは、「自信」「積極性」「絆」を活動の3本柱として、プランナー活動を通して子どもがそれぞれに成長を感じることができるようになることを願い企画をしてきた。

金峰山プランナー合宿では、プランナー3人の「絆」が深まるよう、レクリエーションや名札作り、室内ハイク、夏のキャンプにむけてのプランナー会議を行った。1泊2日の活動を協力して行う中で、互いのことを知ることができ、「絆」が深まったと思う。また、他ブロックのプランナーとも交流を持ち、新たな「絆」を築くことができたようであった。これからの活動にむけて、よい一步を踏み出せたように思う。

夏のキャンプは「阿蘇であそぼう サマーキャンプ」と題して、市内の小学3～6年生14人とともに、国立阿蘇青少年交流の家で沢登り、ナイトハイク、勾玉作り、そうめん流しを行った。初めて一般の参加者を呼んで行う活動ということもあり、プランナーの3人も不安と期待でそわそわしているようだった。しかし、自分たちががたのしむだけではなく、自分たちが企画した活動を楽しんでいる一般参加者の様子見て喜びを感じ、少しずつですがプランナーとしての自覚を持ちはじめていたようであった。その姿にプランナーの成長をかいま見ることができ、とても嬉しく感じた。

プランナー募集で子どもが3人しか集まらず、どう活動していけばよいか不安でいっぱいだった、班長としての自分を支えてくれた方々のおかげで、前期の活動をやり遂げることができたことのおりがたさを身にしみ感じていた。この経験を活かして、さらに自分に磨きをかけたいと思う。

〈後期を振り返って〉

班長 1年 竹下 孝世

後期中央班では「中央公民館お楽しみ会」と「阿蘇カドリー・ドミニオンバスツアー2010」を中心に活動を行った。「中央公民館お楽しみ会」では、学生には2つの願いがあった。1つは、プランナーにはただ参加者と一緒に活動するのではなく、人をもてなす経験をしてほしいという願い。もう1つは、ひとつのものを企画する中で一連の流れを知ってほしいという願いである。この活動は今までの活動とは異なり、お客さんは年配の方が中心であった。そのため、活動内容は野菜スタンプの作成とフライドポテトの販売に決まったものの、お客さんは楽しんでくれるのか、また、プランナーは異年齢の人に対して自信を持っておもてなしをできるのかと私自身不安があった。活動当日、最初は緊張した様子を見せていたプランナーであったが、次第にお客さんに自ら声をかけている様子を見せ、それは頼もしい姿であった。多くのお客さんが笑顔を見せており、それを見たプランナー自身も喜んでいた様子だった。「阿蘇カドリー・ドミニオンバスツアー2010」では、企画の段階から参加者のことを中心に考えてほしいという学生の願いから、「参加者が楽しめるような活動を企画しよう」をテーマとして会議を行った。学生が「どのようにすれば楽しんでもらえるか」といった声かけをすると、「低学年の人なら動物と触れ合ったら楽しんでもらえる」などのプランナー自身が楽しむという意識ではなく、参加者を意識した発言が見られるようになった。活動当日には、プランナーは参加者に「次はこっちだよ」と声かけをするなどして、学生の補助を殆ど必要とせず自分の班をしっかり引っ張ってくれた。また、参加者は園内にいる動物と触れ合って楽しんでいる様子であった。中央班では1年間「自信・積極性・絆」の3本柱を視点にして活動を行ってきた。初めはなかなか自分の意見を言えなかったりした子どもたちが、次第に自分の意見をはっきり言うようになったり、自分の仕事を責任もってしたり、他のプランナーと自然に話すようになったりした。プランナーは3人ではあったが、協力して活動を創り上げることができた。学生同士で話し合っていた際、子どもたちはどこまでできるだろうか、どこまで考えているだろうかとみんなで悩んだこともあった。しかし、子どもたちは私たちの想像以上にしっかり考え、発言し、行動していた。この子たちを見ていると、自分たちの創り上げた子どもの姿に囚われてはいけないうのだと強く感じた。最後に、1年間の活動を終えることができたのも、上島先生をはじめとする中央公民館の先生方のおかげである。これからも活動での子どもの発言や行動をしっかり見て子どもを理解していきたいと思う。

2009年度 龍田班活動報告書

〈前期を振り返って〉

班長 3年 櫻井寧人

前期龍田班では、子どもチャレンジ公民館の活動のうち、「DRAGON楽宿 2009」と「夏来た！あしきた！Let's ドラGO-ンキャンプ」までを企画、実行した。まず嬉しかったのは、予想より多くの子どもたちが応募してくれたことだ。活動にあたり、どうしても募集から力を入れたくて、チラシを作り地域の全小中学校に持って行った。その甲斐あってか、約半分が学校も学年も違う中16名が応募してくれた。ほとんどの子が初参加だったこともあり、仲良くなること、プランナーとしての意識を持つことを中心に前期は進めた。

企画の多い前半で「参加者をもてなす」という気持ちの他に、今回私が大切にしたのは「どうやって決めるか」だった。お互いに慣れない内はなかなか意見を言えなかったり、がんばって発表する子ほど意見に思い入れが強かったりして、まとめるのは難しかった。しかし安易に多数決に任せたり、学生で判断するのは避けたかった。自分の意見を通そうとしたり、納得できず涙する子もいる中で「自分の案の理由を説明したり、ゆずれる部分を考える」時間を何度もとり、話し合いのしかたや内容も学生で何回も話し合った。

そんな中で迎えた夏キャンプ。話し合いで特に時間をかけ、学生の準備も1番大変だったイカダ作りは、アンケートでも1番思い出に残ったと書いてくれた参加者が多かった。時間配分や子どもに任せる仕事など反省点もたくさんあったが、参加者を前にして子どもたちにもてなす側の意識が少しずつ芽生えた様子を見て嬉しかった。また、「海の水は本当にしょっぱかった！」といった感動を口にする子もいて、このような活動に携わる醍醐味を感じることができたことも嬉しかった。前期のプランナーに関わるのは初めてで不安があったが、仲間の支えに助けられ励まされる、思い出に残る半期になった。

〈後期を振り返って〉

班長 1年 長野優紀

後期龍田班では、「パンの家作り」「火起こし体験」の2つ活動をおこなった。これらの活動には、子どもたちに「楽しかった」「プランナーをやってよかった」などの達成感を感じてほしいという学生の思いがあった。

「パンの家作り」は、みんなで協力することができる活動だという子どもたちの意見のもとで決定した。班ごとにそれぞれのアイデアを合わせた個性あふれるパンの家をつくり、とても楽しそうに活動する姿は見るだけでうれしくなった。また、後期最初のこの活動では「準備から片付けまでをプランナーが行う」という目的を立て事前の企画等を進めていった結果、前期のころと比べると少し成長した子どもたちの姿を見ることができた。普段のプランナー会議ではなかなか人前で発表できない子が、活動本番では係の役割をしっかりとこなしたり、自分の意見ばかりを主張してしまう子が、同じ班の一般参加者の子たちを気づかいリーダーシップを発揮したりと、プランナーとしての自覚が芽生え始めたようだった。

「火起こし体験」では、一般参加者に楽しんでもらうとともにプランナー自身も最後の活動を楽しもうということで、「責任をもって行動し、達成感を味わおう」という目的を立てた。この活動では、子どもたちの起こした火で昼食を食べるという企画を立てていたので、火が起きない場合が心配であった。子どもたちは班の仲間と一生懸命火を起こしたが、やっとできた火種が簡単に消えてしまうことが何度もあった。しかし子どもたちはあきらめることなく「よし、もう一回！」と何度もチャレンジし、どの班も火を起こすことに成功した。参加者の子どもたちから「私もプランナーをやってみたい。」という感想を聞いたときは、周りからみてもすごいと思われるプランナーになったのだと感じた。

この6月からのプランナー活動を通して、会議の中で意見がぶつかり合うこともあったが、子どもたちは次第にお互いの意見を譲り合うことができるようになっていった。そんな子どもたちと活動するなかで、私を含め学生自身もいろいろなことを悩み考えて、一緒に成長することができた。単純に学生同士の話し合いをまとめるだけでも難しいうえに、活動の企画をどこまで子どもたちにさせるべきなのかということを決めるのはとても時間を要した。しかし、この経験は子どもを深く考える良い機会となり、子どもだけでなく私も自信をつけることができたのではないかと思う。

2009（平成21）年度 熊本大学フレンドシップ事業シンポジウム・分科会開催要項

日時： 2010（平成22）年3月1日（月） 10：00～16：30

場所： 熊本大学工学部212・214号教室

【午前の部：シンポジウム 工学部212号教室】

1. 開会挨拶 10：00～10：10

熊本大学教育学部長

辻 野 智 二

2. メイクフレンズ活動の実施報告 10：10～11：10

(1) メイクフレンズ活動全体の振り返り

メイクフレンズ船長

勝間田 あぐり

(2) 班活動の振り返りとコメント

メイクフレンズ「大江」班長（前期）

杉 尾 望 帆

メイクフレンズ「大江」班長（後期）

平 位 和 久

熊本市大江公民館社会教育主事

魚 住 敏 彦

メイクフレンズ「五福」班長（前期）

平 坂 千 明

メイクフレンズ「五福」班長（後期）

米 岡 有 紀

熊本市五福公民館社会教育主事

堀 川 貴 史

メイクフレンズ「託麻」班長（前期）

中 島 健 陽

メイクフレンズ「託麻」班（後期）

代 口 成 也

熊本市託麻公民館社会教育主事

中 川 正

メイクフレンズ「中央」班長（前期）

姫 野 祐 輝

メイクフレンズ「中央」班（後期）

竹 下 孝 世

熊本市中央公民館社会教育主事

上 島 和 美

メイクフレンズ「龍田」班長（前期）

櫻 井 寧 人

メイクフレンズ「龍田」班（後期）

長 野 優 紀

熊本市龍田公民館社会教育主事

秋 元 千 佳

熊本市東部公民館社会教育主事

堀 下 欣 也

3. 連携協力機関関係者からの今年度の活動に対するコメント 11:10~11:20

熊本県生涯学習審議員	山平敏夫
熊本県生涯学習推進センター社会教育主事	太田黒保宏
熊本市教育委員会生涯学習課課長補佐	寺崎真治

4. 特別講演 (11:30~12:20)

熊本県教育庁社会教育課長	小野賢志
--------------	------

5. 修了証授与ならびに閉会挨拶 12:20~12:30

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長	吉田道雄
-----------------------	------

6. 連携協力機関関係者との企画運営協議会 12:30~13:10

連携協力機関関係者
熊本大学教育学部教員

【昼食】

【午後の部：学生自主企画分科会 工学部212・214号教室】

7. 分科会の開会式 13:15~13:30

メイクフレンズ副船長	明瀬麻美
------------	------

8. テーマ別分科会 13:30~16:15

「子ども理解を深める」のテーマのもと、《企画・実施・振り返り》を1サイクルとして小テーマを設け、各視点から班別に意見交換を行う。これを機会に、今以上に一人一人が子どもの気持ちや行動を考えることができ、その上で子どもと関わる上での認知、技術を高めていくことを目標とする。

13:15~	開会式
13:30~	導入 討論会 (60分)
14:30~	休憩 (15分)
14:45~	意見交換 (90分)

9. 分科会の閉会式 16:15~16:30

Ⅱ. 分科会の実施報告

学生自主企画分科会

1. 目的

「子ども理解を深める」のテーマのもと、《企画・実施・振り返り》を1サイクルとして小テーマを設け、各視点から班別に意見交換を行う。これを機会に、今以上に一人一人が子どもの気持ちや行動を考えることができ、その上で子どもと関わる上での認知、技術を高めていくことを目標とする。

2. テーマ『子ども理解を深めよう』

班員のモチベーションの差がありすぎて…、無駄な話し合いはしたくない…など、今のメイフレでは学生に目がいくばかりで、子どものことを思う発言がほとんど聞こえていないと感じる。もちろん、メイフレの活動をする中で「学生目線」「子ども目線」の両方がなくてはならないが、今「子ども目線」に立つことが足りていないことに気づき、もっと子どもを見よう、子どもの心を考えようという気持ちを持ってほしいという理由で「子ども理解を深めよう」というテーマに決めた。

3. 小テーマ『子どもの望む活動と学生の望む活動』

初めに導入として、子ども目線・学生目線からみたそれぞれのエピソードの例をあげ、良い点や改善した方がよい点を知ることから始める。その後「企画→実施→振り返り」のサイクルで子どもの望む活動と学生の望む活動のズレについての自分たちのエピソードをもとに話していく。その中で本当に子どもが望んでいるものは何なのか、学生はどのような支援をしていけばいいのか、また子どもの望んでいる事や物を与えればそれでいいのか等の議論をしていくことで深い「子ども理解」の力を身につける。

4. 実施計画

(i) プログラム

- 13:15～ 開会式
- 13:30～ 導入 討論会 (60分)
- 14:30～ 休憩 (15分)
- 14:45～ 意見交換 (90分)
- 16:15～ 閉会式

(ii) 班構成

【1班】

- 1年 芦刈 文子 西留 翔也 中島 恵 福本 祥大
- 2年 杉尾 美帆
- 3年 橋爪 健太
- 4年 阿南 貴詞 堤 千香

【2班】

1年 奥村 優 木村 美貴 田端 万莉 山下 雄太郎
2年 明瀬 麻美
3年 川口 彩菜 平坂 千明
4年 寺下 由華

【3班】

1年 塩本 早織 柿原 智明 米岡 有紀
3年 小山 美紗都 古瀬 文美
4年 岩崎 太貴 川越 靖子

【4班】

1年 伊藤 毅尚 代口 成也 竹下 孝世
2年 中島 健陽
3年 佐郷 加奈 宮本 恵梨子
4年 瀬戸口 靖幸 福田 淳

【5班】

1年 坂口 小夜子 長野 優紀 堀川 ひかり 梶原 まどか
2年 勝間田 あぐり
3年 岩永 拓実
4年 満留 尚人 久木田 透

【6班】

1年 陣内 直子 外栢保 香菜子 丹波 美耶子 平位 和久
2年 姫野 祐輝
3年 小迫 敬文
4年 中島 志穂美 森山 佳美

【7班】

1年 寺嶋 祥吾 山内 悠加 山本 寛
2年 池田 沙紀
3年 奥田 美沙子 櫻井 寧人
4年 大宅 孝明

1班 あっしー、どめ、ち、めぐ、よ、しゅ、みほろん、いんけん、いせかた、ちか、へ

① 子どもの実態について

(HPIさんエピソード)
 ・子ども同会 → 学生の願いが先走り
 → 進捗は程度はOKか? 進捗? →
段階を踏んでやらせてみる
 (学生の定める目標 = 各段階に並ぶための)

② 実態はどいかに把握??

→ 目に見えないもの → ④ インターネットでの流行の遊びを調査
 → 目に見えないもの → ④ 得意課!

(単発 Ver)
 ① 学生の願いや目的を決める

↓
 ② 対象学年の選定
 (活動の場を「学年」で選定)
 → ④ 五福世界の料理
 → 小3〜4年生に「マツ」学習

(継続 Ver)
 ・個別りに関わる(④ 話し)ことで、
 子どもの性格、思考がわかる
 ⇒ それに応じて「支援」方針も考慮
 ④ プリント会議の席順

「子ども理解」といって、「学生」にも通ずるとはありますか??

④(1) 学生をも、新環境に「戸惑」も
 → ④(2) 「YIPPI」入り「マツ」学生同士の話し合いに
 関与「学生」と、「マツ」に「マツ」の子どもの
 心境(「マツ」に「マツ」?)

③ 「学生」は、子どもにとってどんな立場?? <よ、しゅ>

・現メンバーの一員??
 ・プリント会議の相手、自分の意見を
 学生に介して「主張」= 学生に「仲介」??
 ・先生」と口ずかすこと

⇒ 期間を経ることで「マツ」、
 人間関係、立場は変化する

④ 子どもにどうやって求める?? <めぐ、ち>

・「他人の話を聞く」ことと子どもの関係に
 → これは、普段の生活に関わること
 (あるとき「マツ」に「マツ」か?)
 ・方法論の問題に「マツ」の「マツ」?
 → 「マツ」を「マツ」して「マツ」
 → 「マツ」を「マツ」して「マツ」

⑤ 「主体性」とは? <大江、五福>

(大江) - 「主体性」を「マツ」に「マツ」
 → 子ども同士の会話を
 大事にして活動

(五福) - ④「科学の広場」
 → 目的明確、不思議を感じていること
 → 静電気等、体験をしている中
 「マツ」?? と、声を「マツ」に出して「マツ」
 → それを達成「マツ」の
 企画、活動に「マツ」

⑥ 子どもの思いの「マツ」

④(1) 忍者の学生が「マツ」 → (子どもの思いの「マツ」)
 → 学年によって「マツ」が違う
 → 「真剣勝負」を「マツ」している
 ⇒ 「子どもは子ども」と考えるべきこと
 「子ども」から「マツ」して「マツ」を「マツ」

⑦ 子どもの思いと学生の思いの「マツ」



・「学生の自己満足」に「マツ」しているか??
 ・「子ども」の「マツ」に「マツ」 = 子ども理解??

⑧ 学生目標は悪いこと??

・子どもの目標と「マツ」を「マツ」
 悪いこと「マツ」
 → この「マツ」が「マツ」か「マツ」か



⑨ 参加者の「マツ」企画

= 学生の思いの「マツ」か「マツ」か??
 ・学生が「マツ」に「マツ」を「マツ」
 → 参加者が「マツ」に「マツ」を「マツ」か??
 ⇒ ・一概に「マツ」は「マツ」か??
 → ・宣伝の方法に問題「マツ」か??
 ・保護者の視点「マツ」か??
 ・活動の「マツ」に「マツ」を「マツ」か??
 (④ 企画、目的)
 ・参加者の「マツ」に「マツ」か??
 → 「マツ」に「マツ」か??
 → 「マツ」に「マツ」か??
 → 「マツ」に「マツ」か??
 ⇒ 「マツ」に「マツ」か??

⇒ データ分析

・子どもの実態を客観的に把握
 ④ プリント、過去の活動の参加人数等
 ・参加者の「マツ」に「マツ」か??
 → 「マツ」に「マツ」か??
 ・データも参考に、子どもの傾向を把握
 「マツ」に「マツ」か??

2 到王

みきてい・ばたせん・やまゆう・ゆう・あさけん・かわ・よえ・てんてい。

エピソード① 注意する

周囲に迷惑をかけてしまっている
子ども

学生A

目的: 「協力」
→ 他人に迷惑を
かけないこと。

↓
真剣に注意した。

↓
子どもたちも、
なぜか注意されたか
分かっている

↓
その後の子どもの様子も
普通だった。

↓ 学生B

「ルール「ライティング」はダメ。」

↓
「嫌われたくない」という
思いから、
少ししか注意できなかった。

↓
別の到王付きが注意した。

↓
少し沈んでいたが、
元の元気な様子に戻った。

子ども目線

当事者: 「楽しいからいいじゃん!」

周囲: 「少し嫌だな、どうにかならないかな」

学生目線

「周囲に迷惑になっているのを考えてほしい」

「今後の成長のため」

→ 学生の強い思い

エピソード② 対立する子ども

ささいなことでもケンカしてしまった2人の子どもがいたが、意地を張り、なかなか仲直りできていなかった。到王の空気も悪くなり、2人は最後まで仲良くできなかった。

学生目線

「せっかくキャンプに来たんだから、

仲良くしてほしい!」

「到王はしに任せろ。楽しく!」

「みんな協力してほしい!」

子ども目線

「別にみんなと仲良くならなくていい」

→ 子どもにも合う、合わないがある。

「友達に誘われただけで、

望んで来たんじゃない」

「楽しみたい!」

結論

○ 学生の強い思いがあるのは大事! 押しつけはダメ。

○ 1つものの話し合いの中で、子ども目線と学生目線の両方をうまく統合させよう!


○ 子ども一人ひとりに合った支援を考える
→ しっかり、子どもと向き合う。

○ 当たり前のことを「どうしてやるのか」「なんでだろう」と考えることも大事

○ 子ども目線は、1人の子どものことだけを考えればいいのではない。

3 班王 りび・かきー・あすい・ちゃっぴー・こせ・いわちゃん・やっほん

例1 子どもの思うままの活動について

- 学生の思い（子どもにこうなってほしい）が入っていない。
- 子どもの意見を大切にしようという姿勢は大切 
- また、子どものもつ独自のアイデアを実現できるようにしていきたい。
- しかし、学生の思いを活動に取り入れるからこそ、中身の濃い活動になるのではないかな。

学生の都合を優先した誘導になってしまわないように気をつけて、子どもの意見を大切に活動をつくってきたい。



単発では...
学生のみで企画。子どもの意見を取り入れる方法を考えていく必要がある。

例2 会議を子どもだけにまかせる について

なぜ、子どもだけで会議を進めさせたのか。
↓
意図があったはず（自分たちが意見を言い合えるようになってほしい etc）
↓
その学生の意図（目的）と、子どもの段階が合っていたのか。

これまでの会議ではどうだったか。子どもたちはどこまでできるか。を把握する必要がある。

子どものやりたいこと + 学生の思い
バランスよく取り入れた活動に!



あすい、エピソード①

プランを扱わせたがヤケでした。

- 子どもは やりたがっていた。
- 学生も 経験させたかった

↓
子どもと学生の思いは一致していたが、学生の危機管理が甘かった。「経験させたい」だけでは、本当に子どものことを考えていることにならない。その先まで考える必要がある。


ちゃっぴー&りび エピソード

プランナー会議で司会をさせたがうまくいかなかった。

- ヤがって司会をする子がいた
- 他のプランナーは積極性が出いらなかった

↓
○ 学生は、子どもはやってくれる、できると思こんでいた。
○ 司会をさせるキ人前で話せるようになる。他にその子に合った方法があったはず。
○ 龍田では、1度きりでそれ以降司会をさせることはなかったが、「最後までやらない」ではなく、「最後にはできる」ようにしたい。
○ 司会をさせるタイミングと、司会を選ぶ方法を考えることも大切。

学生の原意の中に、

子どもの視点を取り入れて考えられるようにしたい 

あすい、エピソード②

活動のグループ分けを仲良し同士にするのは良いのか。

- その活動の目的に合わせて
人との関わりをのばしたい？
とにかく楽しんでほしい？
- 子ども同士をつなぐために学生がいる。メイプルの活動だからこそできる、「出会い」を大切にしてほしい。

こせ&かきー&いわちゃん エピソード

意欲がなくなる子に対して、どうすれば良いか。

- なぜやりたくないのか
- その子はどうしたいのか。
- 学生のなじんでほしいという気持ちを優先するのか。
↓
- 子どもによって考えはさまざま。その子とどう関わるかは、学生が1つ1つ見つけていくしかない。
- 「子どもがいて、活動ができる」ということを忘れずに、その子にとって、楽しい活動となるような支援をしていきたい。

学生が望む活動と子どもが望む活動

4班

チェック、セーヤ、たかあち、なかし
えりち、さじゅん、せとろ、じゅんた、しゅんた

学生と子どものズレを感じるときは?

学生の目的(学生の思い)とちがった反応を子どもが感じたときに感じることも多い

そんなときどうする...

活動中にこの「ズレ」に気付いたら...
やり方、中身を少し変えるなど
臨機応変に
対応できることが大切!!

つまり...

学生の思いと子どもの実態の**バランス**が大事!!

子どものニーズに合わせて学生側が支援できる体制にしておく

事前対策を考えたおけば臨機応変に対応しやすい

先生との手続き(「こうできるからやります」など)しっかり行い、相談する。
周り(みんな)ともしっかり相談し、話し合う

臨機応変に対応したあとに、(はずしたルールを元に戻す(元の目的や方向性に戻す)ことも大切

全体を通して...

☆ズレではなく、事前準備不足であることも多い
⇒ 「パターン①」「パターン②」と考えておくなどしっかり話し合っておく
⇒ 子どもの実態をよく把握する
(→70%であれば全員と実態を共有)
(→単発であれば最近の子どもの実態の平均を考える)

準備不足は次に生かせるチャンス!

☆**振り返り**が大切!!

⇒ 「こういうところがよかったよ!」とどんどん(おめでいく!)
⇒ 「どこがよかった」「他に生かすには?」など話を広げていく
⇒ 他人のマイクス面も指摘する
⇒ 人に意見を言うスキルがうまく指摘されることへの気付けが大切
⇒ 多く、その人の中にこれから生かす材料として残る

5班: まちsp, くき-sp, た, くん, あぐ
ま, ひーちゃん, シヤ, まる @みち-

☆子ども目線

<例1について>

- たた乗はたけや遅うでるでないう別
- 成り立たない。一般参加の子とも考えよう。
- 学生目線も必要。
- 実際にはまなが、た時、がかりするのは
- 子どもがしたいとか必ずしも良いとは限らない。
- すべて受け入れるのはどうかと思う。
- 準備などできるのか考える必要がある。
- 安全面の検討がないのはありえない。
- 予想と対策が大事。
- 例1は「放任」である。「見守」が必要。

① 子ども目線, 「学生目線」どちらも必要。実態に応じてバランスをとろう!!

<対応の仕方について>

あぐのエピソードより

プランナーで参加している子がお絵書きをしていたので注意しかが泣き出しました。実は前回お休みしていたために話し合いについていけなかったことを後になって知った。

言い方の問題?

お絵書きはサインしたたのではないか。

- 「どうしたの?」という声かけ
- 相手を否定しないこと
- どうしてこうした行動をしたのか理解が必要がある。

② 「子どもの行動1つ1つに理由がある。サインを見逃さないようにしよう!!

☆学生目線

<例2について>

- 橋渡しの立場で子どもの学年にたじて。
- 子どもたちに話し合わせる下地も作ってから任せるべき。
- 実態を知って子どもたちを見極めることが大事。

まちspのお話

2年生 → 自分たちだけで話し合いは(黄) 2人で
話し合い名人カード を用意
話し合いの手順(7シート)
まちゃんと段階を区別する必要がある

まちspのお話

団体行動の時に困った行動をお見直し → 実は本人が1番困っている

自分の想いをうまく伝えられないためにサインを出しているのでは?

「実は先生、あなた〇〇〇という行動は、困った時サインしないかなと思ってるんだけど」

「実は…」と泣いて話し始めた。

ういた子が話し始める前に相手のことを考える必要がある。

<話し合いの仕方について>

まのEピソードより

プランナー同士、仲良くなってほしくて、女の子2人の間に男の子1人を挟んで話し合いを行った。しかし、男の子は話しにくそうであった。

少し極端だったのがもれない。

結果として仲良くなは、たか...

おまは分かるか?

他にも方法があったのではないか。

シヤとひーちゃんのエピソードより

学生主導にならないよう、子ども同士で話し合ってもらいたいと思、見守るようにしていた。しかし思うようにはいかず、学生の支援が必要な場面があった。

③ 段階的に話し合う雰囲気作りを行うことが必要。

<順位をつけることについて>

まるのエピソードより

班の結束、シヤの盛り上げのために班対抗のクイズを行い、ホワイトボードに〇Xをつけた。しかし、ほとんど間違、た班の子どもは落ち込んで楽しくなせなかった。

- 結束を強めてほしかったので、学生は口出しをしないつもりだった。
- たとえ間違ても「なるほど」と思ってほしかった。

しかし、レベルが難しかった。

④ 順位をつけてもがかり(しい縦)方、7人ローが 必要。

実践1 プランナー (中央班)

2人がそれぞれ納得した意見、良かったと思う意見をプランナーに書くようにした。初めは速く書いたが、書き始めるようになった。「ほめる」ことで「認める」ことにつながる

実践2 シクリエーション (龍田班)

まだ仲が悪いのでは? 遅れてくる子がいるということから話し合いの始めにシクを取り入れるようにした。

早くから来て待つ子どもも見えた。シクはアズブレイク以外にも使える。良い所を認めることにつながる。

子どもの望む活動と学生の望む活動

6 班王 そっちゃん、じんぼお、たんぼりん、かず、ひめ
しよーじ、よっしー、ぼーみん

◎アイスブレイクについて

・エピソード①

五福のお菓子の家作りのは、時間の都合上、アイスブレイクを削った。(1年)



関係性が出来てはいまま設計図作りに入り、ごくしゃくしてはいた。

・エピソード②

五福のホール(遊びの広場、科学の広場)のは、アイスブレイクを行なったが、アイスブレイクをしなくて、みんぼうちつけていた。(1年)

①、②より

アイスブレイクは必要か？

①

・アイスブレイクはその名の通り、子どもどうしを打ち解けさせるようにやはりしなげればはらばい。(3年)

・今回の2つのケースは、元々から関係性ができていた場合とそうでない場合。場合によって、必要か必要じゃあか変わってくる。(2年)(4年)

・アイスブレイクは、活動の目的でも変わってくる。例えば、協力を要するものだったら、ある程度関係性ができていないといけない。そのためにはアイスブレイクは必要。(1年)

◎子どもが活動に求めるもの

学生が活動に求めるものについて

・エピソード

「お正月を作ろう」の活動で、レクでカルタ取りを行った。学生は、そのレクでお正月についての知識を得てはしたが、子どもはカルタそのものを楽しめたかったため、学生のお正月についての説明のときはつまらなそうにしていた。(1年)

⇒ 2つを両立させるためにはどうすればいいか？

①

・子どもの気持ちを考える。(3年)



・子どもの気持ちになって考えた上で、どうしたら子どもは興味を持つかが考え、方法などを工夫する。(4年)(3年)

・学生の願いや考えも尊重して、...と思う。(1年)(2年)(4年)

◎子どもの関係性について

・エピソード

プランナー会議のとき、いつも2人組ている女の子がいた。他の子ども話して話か...と思...話し合いのときは、その2人の子の間に別の子を座らせて。しかし、逆にぎくしゃくしてはいた。(1年)

⇒ このような場合、どうすればよいだろう？

①

・学生が3人の仲介として入り、共通にありそうな話題をテーマにする。(3年)

・子どもは少しでもうちとければ、自分たちでどんな関係をつかっていく。(1年)

・無理な理はない。(1年)(4年)

・子どもの実情を考えた上で、立って考えなければはらばい。子どもの気持ちを及ぼ。(2年)(3年)

・活動の目的に合わせて、立って考える。(1年)

理想

子ども ⇄ 学生

・どちらも等しく考えなければはらばい。

・どちらか片方に偏っていてもいけない。(4年)

・子どもの気持ちを考えた上で活動が考えないといい。(1年)

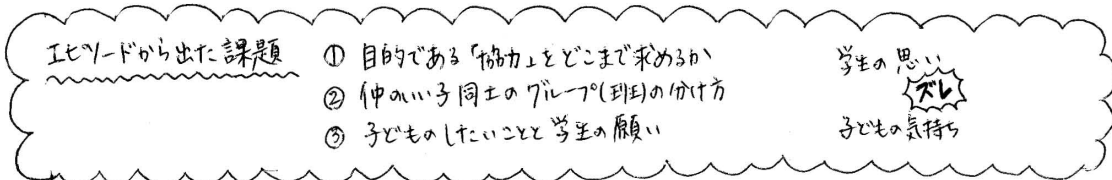
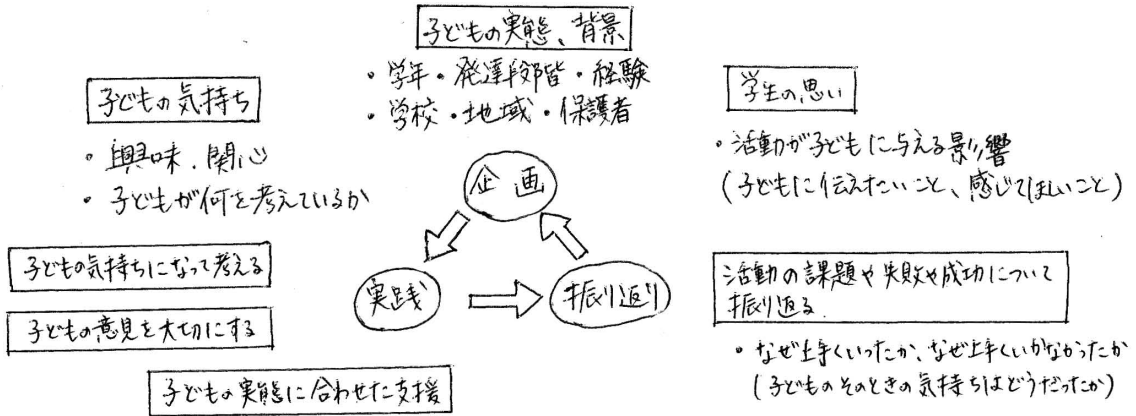
・両方をしっかりと考えていく。(1年)

・当然なことだけ、その当然なことがムズかしい。(3年)

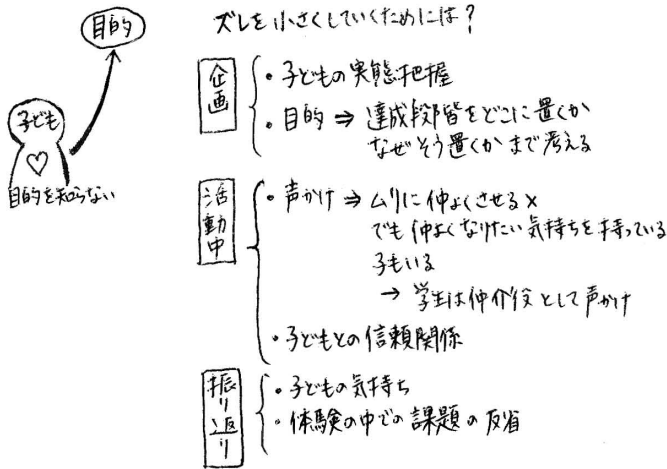
学生の望む活動と子どもの望む活動とは？

7班: いけさき(議長)・ひろ・ばんぐら
 はーづ・さっくん・うさこ(書記)
 おーやん

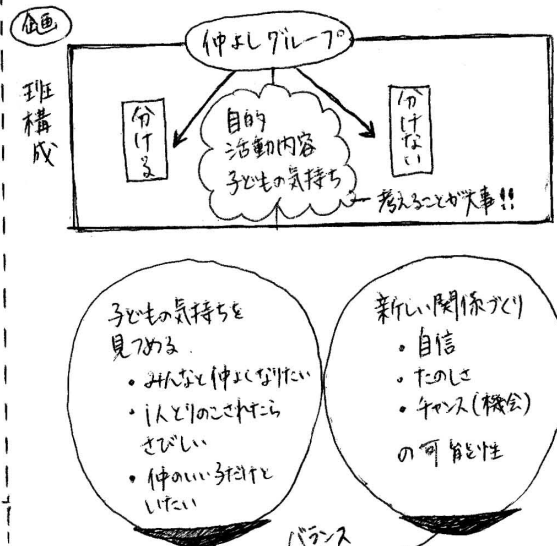
↳ 2つを近づけていくために大切な視点とは？



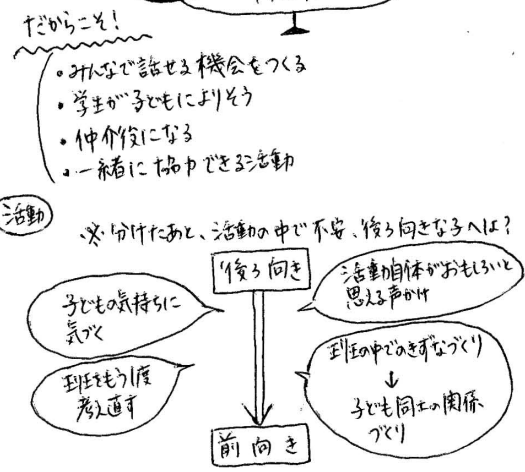
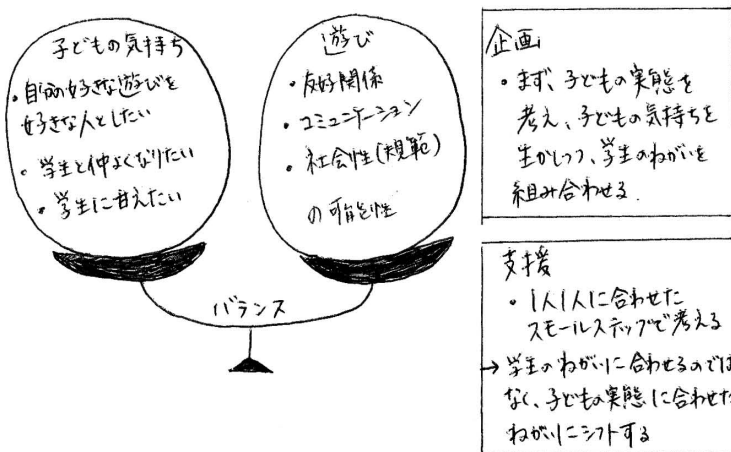
① 目的である「協力」をどこまで求めるか？



② 仲のいい子同士のグループ(班)の分け方



③ 子どものしたいことと学生の願い



学生自主企画分科会事後アンケート結果

シンポジウム後に行った学生自主企画分科会のアンケート結果。

5つの項目について、1については班ごと、2～5については学年別にまとめた。

1. 今回の分科会の中で印象に残ったことはなんですか。

【1班】

- 子ども目線と学生目線について。学生目線で考えて子どもたちにこうなってほしいと願うことは悪いことではないが、時にそれが子どもたちの実態とズレを生じている場合もあり、スモールステップが非常に重要になるのだと感じた。(1年)
- 学生、子どもの目線のバランスが大切なのではないかと。(1年)
- 子ども目線、学生目線の他に保護者への目線が出てきて、3つの目線のバランスが大事なこと。(1年)
- 「メイフレとは何か」ということについて話し合ったこと。(1年)
- 子どもの実態把握について。(3年)
- 子どもの実態と学生の思い描く理想の差があるけど、その差を埋めるにはどうしたらいいのかを考えることは出来ていないと思った。(4年)
- 子どもの実態についてみんなが想像で話っていた。(4年)
- めったに話すことのなかったメンバー（特に1年生）と語ることができたこと。(4年)

【2班】

- 子ども目線は、複数の子どもの目線も入ること。(1年)
- 「なぜ班行動をするのか」という考えたこともない質問。(1年)
- 性格が合わないと言っている子ども2人を少し無理してでも仲良くさせるべきかどうかという問題で、班のために仲良くさせるべきだとか、無理に仲良くさせる必要はないのでは等の色々な意見が出たこと。(1年)
- 班の1年生が、活動のエピソードについて自分なりによく考えているような発言が見受けられたこと。(3年)
- 他班や他学年のエピソード、悩みを聞いたこと。また、それに対する様々な考えを聞いたこと。(3年)
- 子ども目線は子どもになりきって楽しむこと。(4年)

【3班】

- 今までプランナーのことはよく知らなかったけど、やはりプランナーは特定の子どもたちと接することができるので、子どもの成長が分かる。でも、学生の願いを反映させるタイミングが難しい。子どものやりたいこと、やりたいと思われることだけではだめ、学生の願いだけでもだめ。時にはどちらかを抑えなければいけないところもあるけれど、両方のバランスが大事。(1年)
- 子ども目線は子どものわがままなのか。(1年)
- 先輩が「子どもの独創性を大切にする活動をする」ことが大切というようなことをおっしゃっていた。子どもは大人が思いつかないようなことを考えることができたりするし、活動を決める時

などに、しっかり子どもの意見を聞くことも大切だと改めて感じた。(1年)

- 1年生がすごくしっかりしていたこと。(3年)
- エピソードを通しながら、学生目線、子ども目線とはどんなもので、自分だったら何を大事にするのかということを考えさせられた。(3年)
- ホールの子どもの遊びに自由さを求めること、学生とのフリートークができるような環境をつくるのが子どもにとって必要としているもの、ということ。(3年)
- 用意されていたエピソード以外にたくさんのエピソードを聞いたこと。(4年)
- 1年生からもエピソードと結びついた意見を聞いたこと。(4年)

【4班】

- 活動中によく“臨機応変な対応をとる”ことが必要となってくるが、それは具体的にどう行動することなのかをエピソードを交えながら話ができたと。(1年)
- 先輩たちの意見の内容。子どもの実態を知った上での学生目線の作り方など。(1年)
- 子どもが望んでいるから活動を変更⇒学生はただ変更するだけではだめ。先生の許可や危険予測、たいへんさなどすべてをしっかりと考慮し、また元のタイムテーブルに戻れるようにしなければならない。ただ活動を変更するのは臨機応変とは言わない。(1年)
- 臨機応変に対応するために気をつけることとその必要性、振り返りでは他の学生のマイナス面も指摘することで互いに信頼し、成長できるということ。(3年)
- “臨機応変”のサイクルの話。子どもの実態・目的・時間などの制限を全て考えて初めて“臨機応変”な対応ができる。(3年)
- 討論会が当日消えてしまったこと。(4年)
- 当日変更がたくさんあったこと。(4年)
- 「臨機応変に動く」ことの意味とそうするために必要なこと、また、そのために子どもの実態を把握しようとする姿勢。(4年)

【5班】

- 子どもが出したサインを見落とさないことが子ども目線に立つこと。(1年)
- 子どもが問題行動(課題をやらなかったり)をするとき、一番困っているのはその子の対応に追われている学生ではなく、その子自身であるということ。子どもの行動1つ1つには意味があるということ。(1年)(2年)
- どのエピソードでも出ていた「子どもの実態をつかむ」ということ。1年間同じ子を見るプランナー活動でも毎回違う反応を見せたりしてなかなかつかめないし、たった半日くらいの単発では到底たどり着けないと思うけど、活動をやっていく上で大事なことだと思う。(1年)
- 子どもの行動一つ一つに含まれている意味に気づくこと。(1年)
- 行動だけを見て注意したり叱ったりすると、子どもたちはどうして気持ちをわかってくれないのかと思ってしまうということ。(1年)
- プランナーと単発での活動における様々な視点があるなと思った。(3年)
- 子ども目線と学生目線についてあいまいだったものが以前より明確になり、やはり大事だと思った。(3年)
- 「子どもの行動一つ一つに意味がある」「大人が思う問題を起こす子は、問題児ではなく、困っ

ている子」という言葉。(3年)(4年)

- 先輩の、学校でくつを入れ替えていた子どもに対して、「くつを入れ替えていたのは、あなたが何か困っていることがあるからだよね」と言ったエピソード。(4年)

【6班】

- 子ども目線と学生目線の話では、いろんなズレがあったけれども、子どもと学生の両方の目線があって成り立つことだということ。(1年)
- 子ども目線とか、学生目線とかいろいろ話したけど、結局はどちらも同じくらい意識しなくてはいけないことだということ。普段話し合いをしていると、学生側の都合で考えてしまうこともあるけど、「子どもがどう感じるか、何を考えるか」をしっかりと常に意識しておくことはとても大事だと改めて感じた。今日話し合ったことを忘れないようにしたい。(1年)
- アイスブレイクでの話。アイスブレイクとは元々何のためにするのかといった話や、テーマから考えるのかどうかという話がすごく白熱していた。(1年)
- みんなが思いっきり意見を言い合い、すごく盛り上がり話がとても深まったと思う。自分は議長という役目を授かっていたが、どちらかと言うと班のメンバーそれぞれに得るものがあったのではないだろうか。(2年)
- 私たちの班は、主に子ども目線について話し合ったのだが、私たちは、子ども目線と学生目線は一对一でなければならないと達した。やはりこの考えが最も印象に残っている。(3年)
- “子ども目線”、“学生目線”という概念について、ほとんど当たり前のようになっていたので、改めて深く考えることができ良かった。子どもの思いを汲み取り、子どもの現状を見つめながら学生の願いも取り入れることが重要だと改めて感じた。(4年)

【7班】

- 目的を子どもの実態に合わせて調節することが子ども理解につながる。(1年)
- 「子どもはこういうものだ」という固定概念を持つのは大事だが、それを押し付けてはいけない。(1年)
- 一つのエピソードでも、より子ども理解を深めるための視点は一つではないということ。みんなのとらえ方を聞いて、自分だけで考えていたことは子ども理解をするためのほんの一部でしかないと感じた。子どもについてしっかり考えたつもりでも、それだけで満足することは、学生のエゴ(自分勝手な解釈)につながるのではと思う。人と話す、いろんな面からわかろうとすることが大切だと感じた。(2年)
- 議長がみんなの疑問、話したいことを中心に話そうとしているのがすごいと思った。だいたいの方向性は見えていたと思うが、そこに無理矢理沿わせるのではなく、みんなのペースを見て進めている姿は、子どもと関わる学生は持っていなければならないものだった。(3年)
- 1年が自分の考える学生目線というものをしっかり持っていたこと。(3年)
- 班のみんなが、子どものことをとても純粋に知りたいと思っていたこと(特に1年生)。(3年)
- 議論が迷走していたこと(司会が大変そうだった)。(4年)

2. この分科会を通して今後生かしていきたいことはなんですか。

【1年】

- 今日の分科会で、いつも言っている子ども主体の活動とは、ということについて深く考えることができた。子ども目線になって考えると一概に言っても、方法は様々にあるので今後そのようなことを視野に入れて、常に考える姿勢でいたいと思った。
- 多面的な視点を持つことの大切さ。
- 学生の願いがなければメイフレではないけど、そこにいかに子どもの願いも取り入れてあげられるかを考えていきたい。
- 子どもが団体行動を乱したり、学生話を聞かなかったりしたとき、すぐに言うことをきかせたりするのはなく、どうしてこんなことをするのか理由をまず聞いて子どものサインに気づけたらいいと思った。また、レクや企画の段階でもこのゲームは子どもにとって楽しめるものなのかを考えてプログラムを作るなど、子どもと直接接していない時でも子どもの立場で、子ども目線であることがあまりなかったのでこれからしっかり考え話し合っていきたいと思う。
- 今まで、学生のできる（してあげられる）中から子どもがしたいと思っているであろうことをしていたが、これからは、子どもがしたいと思っているであろうことから、学生のできることをしていこうと思った。
- いろんな具体的なアドバイスをもらったので実践に生かせるといいと思った。例えば、注意をするときや何かを分かってほしい時に、理由を説明すること。理由を説明することで、自分が何で言われているのか、何のためにそうしなければいけないのかを子どもが納得できる。理由を説明することで、自分が何で言われているのか、何のためにそうしなければいけないのかを子どもが納得できる。また、子ども自身に問いかけて、自分で考えさせることも有効であること。
- 分科会の際に話し合ったこと（今後の振り返りのやり方、人に対して意見を言うこと、バランスを考えた臨機応変な対応、事前の準備など）。
- 子どもの状況に応じた支援をすること。そのためには、よく子どもを観察しないといけない。
- 学生の押し付けは単発、プランナーともに起こりうる。企画からの注意が必要。
- 良いか悪いか決めることは難しい問題が多く、子どもの実態に合わせていく必要があると思った。
- 活動中において、子どもが今何を考えてこの行動をとるのかきちんと汲み取ること。そのために子どもたちの様子をしっかりと見て、その子の性格などを把握すること。
- 目的の決め方、班の決め方、子どもの実態に合った活動。
- 討論会で先輩方から聞いた子ども理解に関する考え方。
- 「子どもの実態をつかむ」ということ。なかなか難しいとは思いますが、例えば、前に似たような子がいたな、とかでその時と同じような対応をすればいいかもしれないし、経験を積むことで、少しでもつかめるようになると思う。
- 目的に沿って活動を考えること。子どもの状況や実状に合わせた学生の支援やフォローの見極めの重要性。
- 叱ることの大切さとその方法（理由を告げる、考えさせる）。
- 具体的な表現で今まで自分が遭遇したことのない場面での対応の仕方などを先輩方の意見を交え話し合うことが出来たので、実際にそのような場面に出くわしたときにある程度は冷静にいられる。
- 活動において、学生の願い（目的）と実際の子どもの反応や願いが違ってくるのが十分あると

思うので、その時には、最低限踏むべきこと（話し合いや責任者の許可）をして、その場で子どもに合った行動や活動に変更することも必要であるということ。

- 子ども目線だけではなく、だからといって学生目線だけに偏りがちにならないように、両方の面から考えていくということの大切さを感じた。活動を企画する中で、子どものニーズ、学生側の何のためにその活動を行うのかということをもふまえて、企画していきたい。

【2年】

- 子どもの出しているサインに気づけるように、子どもたちの様子をじっくり見る。そして、まず、その子がどういうことを思っているかの情報をうまく探りだしていった上で、支援を考えていきたい。
- アイスブレイクについての話は、改めて自分の考えというものを見つめなおす良い話になった。
- 「子ども理解」のために大切だと思うことは人それぞれだと思うし、1つではなくたくさんあると思う。しかし、それらは全部「子ども理解」を深めるために大切なことだと感じた。メイフレで話し合うことで、今まで自分が気づけなかった視点から、メイフレの活動をよりよくしていくための方法が見えてくると感じた。「人の意見を聞く」「子ども理解とは何だろう」ということを意識して話し合いに参加していきたい。

【3年】

- 子どものことをしっかり考えていきたい。子どもの実態に応じなければならない。方法は子どもによって様々。
- 振り返りでは、自分のことだけでなく、他の学生のこともしっかり指摘して行こうと思った。
- 本当に子どものためを考えるのであれば、どのような支援が最適なのが常に考えていきたい。
- 子ども目線と学生目線が対一であることを心掛けていきたい。このことは口で言うのは簡単だし、当然のことであるが、実際に活動を行っていくと、やはり見失いがちである。当然のことを当然のようにやるのがいかに難しいかを、この分科会で改めて知れたのは本当に良かったと思う。
- 子どもの実態をちゃんと把握して活動を考えること。振り返りなどのときも、子どもの話を深くすること（企画面の反省だけでなく）。
- みんなの意見を聞こうとすること（受信）、また話そうとすること（発信）の気持ち。
- 子どもの実態把握のためには、これからもっと子どもを見る目を養っていき、その実態に応じた目標を設定し、活動に臨んでいくことが大切だと思った。
- 私自身学生目線で物事を考えることが多かったので、子どもの視点も考慮しながら、今後の活動に取り組んでいきたい。
- 両極端なエピソードを通してメリットとデメリットを出し合いながら、その子どもはどんな思いでそう動き、また、その手段だったからこうなった、だから前段階が必要だなど、学生の望み、思いをもちつつも、子どもの動き、その子に合う支援の仕方考えることが子ども理解であるなと思った。そのことを考えながら今後活動で生かしていきたい。
- 「子どもの行動一つ一つに意味がある」「大人が思う問題を起こす子は、問題児ではなく、困っている子」ということをふまえて、子どもの行動の背景を知ろうとする。
- 活動中はもちろん企画、反省において、子ども目線から考えると違う発見があるなと思うし、学

生目線だけでは十分ではないところが多くあると思うので、今後その点をふまえて行動していきたい。

- 学生の考える活動の目的を追求することは大切だと思った。例えば、“協力する”という言葉だけに終わらず、協力することで子どもに何が残るかというような、もっと根本を考えていく必要があると感じた。

【4年】

- 子どもの実態を、憶測ではなく、実際に話すことやデータ（アンケート等）を通じて把握すること。
- 当たり前のようにになっていることに対して、疑問を感じたり、周りの人の意見を聞き考えなおしたりすることが大切だと思ったので、メイフレだけではなく、他の場面でも生かしていきたい。
- 最近、学生目線で物事を考えるが多かったような気がしていた。今回話をしてみて、どちらの視点も大事であり、バランスを学年別に子どもの実態に応じて取ることが大事だと分かった。今後も現場で生かしていきたいと思う。
- 「なんとなく」で決めないこと。自分たちの想像上の子どもの姿を想定して話すのではなく、実際の子どもの姿やニーズをきちんと分析することも大事だと思う。保護者の方にアンケートをとったり、これまでの活動の集客率を参考にしたりして、本当のニーズや評価を知る工夫をしてみたらどうか。
- 子どもの視点に立った活動と学生の強い想い。
- 「学生の願い、子どもの想い」この2つをともに大事にし、その時々によって状況を見極めた活動を行っていきたい。
- これまで学生の思いで企画を進めていたことが多かった。子どもたちはどう思うだろうと振り返って考えることの大切さを再確認できたので、これから気を付けたい。
- 今回の話に出たことが日頃の話し合いでも意識できるようにしたい。
- 「自分たちで成長し合おう」という、話し合いにおいて、他人に対して想ったことを素直にぶつけ合うこと
- 子どもの気持ち（相手の気持ち）をくみ取ろうとする気持ちとスキルを磨けるように頑張りたい。
- 色々な視点があること。

3. 「もっとこうしたら良かったな」という点はありますか？

（テーマ設定、アンケートの形式など、準備段階から当日も含めて）

実行委員の動きや、自分に対しての事、ディベート・分科会の形式についても構いません。

【1年】

- 同じ班の人が誰もいなかったのので、色々な班の人の話をたくさん聞くことができとても良かったと思う。また、皆が疑問に思っていることを議題にしていたので、正しい答えは分からないにしても、自分にはなかった考え方、見方を感じることができた。
- 班構成だったのはやりやすかった。でも、本来みたいに、途中班変えもして、違った意見も聞きたかった。
- 事前にみんながエピソードを書いてそれがとても分かりやすくまとめられていたので良かった。
- 討論会と意見交換会を同じ班の中でつなげて話せたので話しやすかった。

- いいと思った。他班と話せるのは、知らないことを知ったり、もっと新しい視点で考えたりできるので良いと思う。8人だったので、自分の思っていることを言うこともできたし、（議長にふってもらったので）いろいろな人の意見を聞くことができた。
- エピソードを挙げると少し方法論的な話になるので、もう少し根本的な話もしたい。
- 小グループに分かれて、議題やエピソードなどの話し合う材料があったのでやりやすかった。
- 班の人数などはちょうどよかったと思う。同じ班の人がもう一人いてくれるだけで心強い。
- 意見やエピソードなど多く出ていてよかったと思う。少人数ごとのグループだったので話しやすかった。
- テーマが広い分いろんな話が聞けて良かったと思う。
- 討論会の例がイメージしにくかった。プランナーを知らない人もいた。どんな基準で班分けをしたのか。
- エピソード例が抽象的すぎた。エピソード例が両方ともプランナーの話で、単発しか経験がない人は困っていた。
- テーマが明確で話しやすかった。エピソードを用いての議論は自分も話しやすいし、状況も分かりやすいのでとても良かったと思う。
- 少人数の班だったので、自分の意見を言える機会がたくさんあったし、先輩の意見をいっぱい聞けて良かった。
- エピソードを交えてしたことはやりやすかった。けれども、エピソードの話から必ずしも、企画→実践→振り返りのサイクルに進むわけではなく、班でもそういった意識がなかった。エピソードに沿って話していると「これテーマにずれているのではないか」という声もあったけれど、個々人でテーマの捉え方が違うので、ズレの判別がしにくかったかもしれない。
- 後半の学生の意見交換で、形式自体に特に意見はないが、実行委員が少し動揺を隠せない様子だったので、自分も動揺してしまった。
- 実行委員から話し合いのねらいを聞いてわかったこともあるが、それを聞くまでは実行委員が話し合いで求めているものが少し掴めなかった。
- 自分の経験し、これはどうなのだろうかと感じていたことに対し、たくさんの人のいろいろな面から見た意見を聞けたのでよかった。
- 「子ども理解」ということに対する答えや正解はないと思うので、今までよりもっと子どものことを深く考え、メイフレについても深く考えるきっかけとなった。

【2年】

- 最初に「子ども視点」と「学生視点」について考えるワークができたのは、次の話し合い（エピソード）のときに生きてきてよかったと思う。ただ、進めるのは難しかった（書記も大変そうだった）。
- 自分の班は班員が引っ張ってってくれたけど、他の班はどうだったか。
- 子ども目線、学生目線のエピソードは、それぞれの思う子ども目線、学生目線が一致しているとは言えないので、出さない方がよかった。

【3年】

- 最初の案にあったディベート形式が新しいなと思っていた。同じメンバーと様々なエピソードについて話せてよかった。
- 最初のエピソードを見て、気づいたのを書くのは例が極端で考えにくかった。そのあとの各自のエピソードから話すのは具体的な例で話しやすかった。
- 時間は今回のテーマを扱ううえでは十分だったと思う。
- 今回の分科会の目的は「子ども理解」であったが、これを分かりやすく、例を参考にして各班で進めたのはものすごくよかったと思う。しかし、考えられる範囲が制限された面もあり、自由度がちょっと少ない気もした。みんなそれぞれエピソードを持っているわけだから、そこから「子ども理解」に向けて掘り下げていっても良かったかもしれない。
- 最初の討論会のところは、もう少し工夫が必要だった。
- グループ分けの基準が分からないので、みんな話したいことが話せたかは不安だが、話し合いの流れそのものはいい感じだった。最初の例がプランナーに限定されていたのが、知らない人に少し説明が必要で残念だった。
- 少し時間が長かったように思う。
- 結構議長まかせの部分があった。それぞれ違うエピソードから目線（学生・子ども）に結びつけて考えたけれど、うまくできなかった。討論会と意見交換会との関連もよくわからず、私を含め特に1年生にとって難しいようだった。考えてもらいたい話題を明確に提示したり、話し合いの方向性をもっとはっきりした形式にしたりした方がよかった。
- 2回話し合うエピソードがあったのは、話し合いに効果的だったのか。前段階は必要だったが、エピソードについて根本的な疑問や設定があいまいな部分で、混乱を起こしてしまった。
- 自分が少し誘導してしまった部分が話しながらあったので、議長は実行委員以外がすべきだったと思う。
- 以前に行った「子ども理解について」のまとめたもの等を前もってみんなに見せて、思い出してもらっても良かったと思う。
- 討論の時間に行ったものが、実行委員が考えた目的にまで到達できていなかった。しかし、「子ども理解」というメイフレの根底にあるものを取り上げ、みんなの意識をこんなに上げられたのは、今年の分科会の大きな功績だと思う。

【4年】

- 分科会の2部形式（特に1部）が初めての体験だったので新鮮だった。今回2部に分けて行った意図があまり理解できていなかったのも、そこをきちんと理解する必要があったと感じた。また、他班がどんな話をしていたのか聞きたかったので、発表があっても良かったと思った。
- 書記をやったのだが、意見を言う、書くということではなかなか話に入っていくにくい場面もあるのと同時に、全てをまとめきれないので少々戸惑った部分があった。もう少し書記への負担を減らせるように今後改善してほしいと思う。
- 何を話せばいいのか、何を話してほしいのかがはっきりイメージできなかったのも、結局、あまりテーマに沿った話はできなかったのかもしれない。いろいろ思ったことを言ってしまったけど、こんな話でよかったのかな、というのが率直な感想だ。
- 当日変更点がわかりにくかった。

- 事例1、2とその後の意見交換が少し別ものになってしまった。事例1は、子ども目線なのか、意見交換会で話したことが各班違うようだった。
- 議長に任せるのもよいが、スタート、ゴール像を委員内で共有できていたのか。
- 今回の分科会のテーマである「子ども理解を深める」について、子ども目線や学生目線というものを切り口に話し合いを進めた。しかし、話をふくらますことができず、「子ども理解」につながったかどうかは、わからない。もう少し、自分の技量があればと思った。
- 是非、もっと多くの先生方とお話ししたかった。
- せっかく各班で意見を出しているのに、後日まとめたものを配るのもありだとは思いますが、その場で今一度考え、まとめ、発表することで他の人の学びの手助けになるのではないかと。
- みんなが1つのテーマについて話すのではなく、いくつか小テーマをもうけて、話し合いをしてもおもしろかったと思う。
- 討論会での例1、2と意見交換会でのエピソードからの話し合いとを結びつけて話すのは難しかった。
- 4年生が書記をするのは、出しゃばりすぎない、という点でよかったと思う。
- 導入のテーマがわかりにくかったし、理解しにくかった。「何でもいいので書いてください」と言われたが、それでも書きにくかった。
- 先生方が1人も分科会に残られなかったのは少し気になった。先生方の視点や意見なども聞いてみたいところもある。メイフレの顧問の先生方には特にいてほしかったので、事前に少し強くお願いしてもいいのかなと思った。
- 「ズレ」に対するエピソードを書く意味や、「ズレ」がどういうものなのかの意志統一がいまいちされていなかったと思う。これはメイフレに行っていない者の責任が一番だと思うが、それでも、もう少しなんとかできたのかもと思った。
- エピソードを中心に話し合ったのは、その時の状況や気持ちが聞けたので話しやすかった。
- 討論会で共通のエピソードを、意見交換会で班ごとのエピソードをとりあげるといった形式はありだと思いが、討論会でのエピソードはエピソードの形をしておらず、話は深まるはずもなく終わった。
- 学術的な議論に不可欠な用語の定義づけがなかったのはおかしい。「子ども目線」「学生目線」といった言葉の定義が曖昧で、何をしたいのか理解に苦しんだ。実行委員のいう「子ども理解」とは何だったのだろうか。

4. 今後、メイフレで話してみたいと思うことはなんですか？

【1年】

- メイフレとは何か。社会教育の視点を入れて活動を考えるべきなのか。
- 学生の立ち位置（教師の立場か友達の立場か）。
- 皆さんの困ったときのエピソードが聞きたいと思った。どうすればいいのか、なんでそうなったのかとかを考えると今後役に立つのではと思う。
- 「子どものことを考える」について「プランナーの子どもに失敗を経験させていいのか」
- 学生目線と子ども目線のバランスの詳しい分布。
- 子どもへの支援の見極めについて（どこまでして、ここはしなくていいなど）。
- 企画名の有効性。

- プランナー会議で時間があまりなく、学生のペースで進めてしまい、子どもの意見をあまり聞くことができないことがあった、どのようにすれば、子ども主体のプランナー会議ができるのか話し合ってみたい。
- 先輩たちがメイフレで得たものとか聞いてみたい。
- 何でもいい。話題がなくても（提示されていなくても）、その班の中で、その時疑問に思っていたことを誰かが言えば、それについてみんなで考えていけると思う。むしろ、話題（テーマ）のないしゃべり場も面白いと思った。そのとき、その人が何を悩んでいるか分かる。悩みの共有。
- 話し合い方について（意見の引き出し方など）。
- 子どもをしかるときのタイミングと方法。
- 子どもの実態をつかむにはどんなところに注意を払えばいいか。
- どんな企画が子どもや保護者に求められているのか。
- 今のメイフレの活動順序がパターン化されているのではないか。レクなどの決め方が効率重視になっているのではないか。例えば、目的から活動を決めるべきだが、したい活動を決めてから目的を考えている、など。
- 今回のように具体的に自分が体験したエピソードを挙げ、それについてどう対処すべきだったか、どのようなことを感じたか等、複数人で意見交換したい。

【3年】

- メイフレとして、何を1番大事にして活動していくか。
- 振り返りについて。結果だけの振り返りに終わってないか、次に生かせる振り返りになっているか話したい。
- 五福との関わり方（ホールの在り方）について。
- メイフレの課題となる参加者の少なさやリピーターの増加について。
- みんなの考える学生目線、子ども目線の違い。

【4年】

- メイフレで何を得たいか、何を求めたいか、個人的なことでも団体的なことについてでも良いので考えると、今後の活動でどう動けばよいのかが見えてくる気がする。
- 子ども理解についてのテーマでももっと深く話してほしいし、目的が異なってしまいますかもしれないけど、「これからメイフレがどうなっていくべきか」「メイフレが子どもたちのために何ができるのか」ということについてみんなで話すと面白いのではないかと思う。
- みんながメイフレでどんな活動を良い活動としてとらえているか。
- 子ども目線とは。
- 活動に教育的効果を求めるとは。
- メイフレという場にいることのありがたさと話し合いの雰囲気について。
- 来年の班体制について（全員で話し合う場を設けることで、メイフレでの心構えや、やる気などの再確認ができる機会になるのではないか）。
- メイフレでの経験（学び、具体的）⇒教育の話（大きな意味、抽象的）⇒学生間の教育（具体的）。
- 我々が抱える子ども像（虚像）と子どもの実態（実像）、それらの差異とその溝を埋めるための「子ども理解」、それを目指すための定例会や活動本番での行いについて。

5. ご意見・ご感想をお願いします。

【1年】

- 今日一日でとても濃い時間を過ごすことができたし、それぞれのメイフレに対する姿勢を改めて考えることができた。
- もっとストレートに「子ども理解って何ですか」のほうが話しやすかったかもしれない。逆にエピソードを加えられると、そこから入っていくので、「子ども理解」に結びつけにくかった。分科会のみなさんはほんとにお疲れ様です。すごくいい影響を受けた。
- 初めて参加した分科会だったが、とても念入りにプログラムが組み立てられていて、スムーズに進行していたので、来年がまた楽しみだ。
- 思っていた以上に楽しく、気軽に発言できたので良かった。先輩方の体験談もたくさん聞けたので、これから生かしていきたい。
- 普段なかなか深く考えなかったことでも、良く考えればそういう気持ちや意味だったのかと気づいたり、そういう考え方もあるのか、自分の考えはわがままだったとか学生のエゴだったのかなど考えさせられたりすることが多かった。
- 子ども目線と学生目線については深く考えることができたと思う。また、直接は関係なくても、いろんな話をいろんな人とできて良かった。プリントで子ども目線と学生目線に対して定義がなされていたが、個人的にはこの部分話し合いたかった。この定義は対比もされていないし、定義的にもズレていると思った。
- メイフレがすごいサークルだと改めて感じた。それは各先生や教育長の方々が来られたことだけでなく、先輩方がとても深い考えをなさるからそう思った。
- 今日は、エピソードもたくさん聞けて、その中で、いろんな意見が聞けて良かった。1つのことにいいところも悪いところもあることも多く、必ずこれが正しいという答えが出ないのが難しいと思いました。だけど、話し合う中で、よりよいのではないかという考えや見方が分かるようになると思えました。
- 最初の〇〇目線の例は少し考えにくい。プランナーをしたことがないので、今一つ具体的に考えられなかった。しかし、話の中でプリントにはない様々な体験談が出て、とても有意義だったと思う。ところで、全体の中で、「子ども理解」についてある程度でも方向性が導き出せたのはどれくらいだろうか。あまりに根底にあるので、話し合いの中でついつい埋没してしまうキーワードであった。
- 色々な意見が聞けて良かった。班名中にはプランナー経験者や、単発経験者がいたため、活動ごとの内容や様子を知る機会になって新鮮だった。個人個人のメイフレや活動に対する思いが知れて良かった。
- 長時間にわたって各学年の人と話すことはあまりないので、たくさんの人の考えを聞けて良かった。もっと時間がほしいくらいだった。来年度に向けてまた新たに考えさせられることもあり、意味あるものになったと思う。
- 今回の分科会で今まであまり話したことのない人の考え方、意見を聞くことができて、自分の中の視野が広がった。このような機会をもっと設けるべきだと思ったし、個人的にもしていきたい。
- こういう機会と言うのはやはりとても大切であり、貴重であると感じた。色々な人の意見を聞いて、それを今の活動に当てはめていった。改善すべき点があった。もっとこのような機会がほ

しいと思った。

- 討論会の議長として全く役に立てなかった。自分はこういう役目に向いていないことが分かった。話の先が見えず、討論会はうまくまとめきれなかった。やはり、先輩方の前では一切自分の意見が言えない自分がいた。話し合い中に混乱して、話を止めてしまったのが申し訳ない。
- 個人的にはすごく楽しくて充実した内容だった。これから班長として話し合いを進めていく上で今日得たものをどんどん生かして、自分のやり方を見つけていきたい。
- 分科会で私が考えもしなかったたぐさのを知ることができた。この経験を今後のメイフレ、教育実習などで存分に生かしていきたいと思った。
- 自分が困っていたところなどのアドバイスも聞けたり、いろいろな人の話を聞くことでまた自分の考えも変わったり、見方も変わったりすることができたので良かった。
- すごく内容の濃い話し合いができて良かった。難しい内容もあったけど、先輩方がフォローしてくれて、自分なりに考え理解することができた。様々な方向からの意見が聞けたので、今後の活動に生かしていきたいと思う。
- テーマが抽象的なので、ズレが生じた。これが悪いとは言わないが、良い事なのかと言うと分からない。討論会では例1、2がけっこう曖昧で考えづらかった面がある。結果的にどちらも大事となったが、まとめにくくなった。
- “子ども目線”、“学生目線”といったものが正確にどういうものなのかは定めることはできないけど、自分たちはそういう目線で普段から話し合いが出来ていると感じた。
- 企画することに目が行きがちになる傾向が特に班長さんなどに見られるそうなので、いろいろと決めることも多く大変だとは思いますが、細かい部分に気を配りながらしっかりと話し合いを重ねて、子どもと学生の両方が納得できるような活動を作り上げていこうと改めて感じた。
- 意見交換の場で、自分の意見を相手にそのまま伝えることに対して苦手意識があり、あまり好きではないので、最初は引き気味だったが、実際にやってみると、自分の言いたいことがまれに相手に伝わりうれしかったので、その苦手意識を克服するためにもたまには意見交換もいいなと思った。
- 普段ではあまり出来なかった子どもに対する深い話が出来て、とてもいい機会になった。
- 活動をこなすことに精一杯になり、あのかのときのあの子の行動はどんな意味だったのだろうか、学生はどんな風に対応すればよかったのかをきちんと振り返って考えることが出来ていなかったように感じた。
- 子どもの目線に立ったら考え直さなければならないことを、決めなくてはならないことを進めたいがために放置してしまっていた。来年度、もっとそこを考えながら活動していきたいと感じた。

【2年】

- 学年に関係なく、何かしらの「気づき」があった分科会で、メイフレの軸である「子ども理解」の話ができて、とてもよかった。個人的には、先輩の小学校での貴重なエピソードが聞けたので満足だ。
- 個人的にはみんなと色々話ができ、もっと話したいと思える分科会だった。来年に残せるといい。
- 議長をしたが、「みんなの話を聞く」ということができなかった。また、1年生の発言できる場がうまく作れなかった。せっかく練り考えた分科会だったので、もっと議長として生かせる流れ

を作れたのではないかと思う。

【3年】

- ずっと顔をしてなかったというのもあって、みんなが（2年生とか）前に立って指示を出している姿が新鮮に映るかなと思っていただけ、そんなの感じさせないくらいみんな堂々としていて格好良かった。
- 時間がたつのがあっという間の分科会だった。子どもと学生のズレについて漠然としか考えていなかったが、その時の対応の仕方、必要なこと、活動で感じたこと、たくさんのお話、意見が聞けてよかった。そうだなと思うことが多くて、これから自分は何ができるか、そしてもっと頑張ろうと思えた。とても良い時間だった。
- 今回の分科会を通して、色々な人のエピソードを聞き、自分自身たくさんのお話を考えさせられた。
- 私自身、毎年分科会をものすごく楽しみにしており、今年も、ものすごく充実した時間を過ごせたと思う。本当に分科会に来てよかったと思う。
- 今回かなり大きなテーマを取り上げるようになって、本当に大変であったと思う。でも、自分自身を振り返り本当に良い機会になった。これからも、まだまだメイフレで頑張りたいと思えた。
- 今年も班の中で濃密な話をすることができて良かった。実行委員に入らないことは初めてだったので、参加者の気持ちを体験することができた。（子ども、学生に関わらず）という話のできたので、そこからエピソードを色々な角度から見ることができたところが良かったと思う。
- 今回の話し合いでは、子どもとの関わり方、理解の大切さなど、様々なことを学べるよい機会だった。
- うまく議長として話を持っていくことが出来なかったことが悔しく、また、申し訳なかった。もっと分科会の目的など考えてほしかったことを汲み取れたら、もっとよい議論になったと思う。
- 準備が不足していたように思う。
- 今回実行委員として、メイフレに関していっぱい考えられたことが自分にとってプラスになった。また、「子ども理解」に必要な方法や考え方を知れて、有意義な時間だった。これで学べたことを次に生かせるようにしていきたい。
- 時間をかけて話し合った分、準備段階も当日もとても学びのあるものになった。また、みんなが自分の話したいと思っていることを話している瞬間は見えてとてもうれしかった。

【4年】

- テーマの着眼点は良かったものの、前半のエピソード（2つの事例）は抽象的で難しかった。様々な視点や意見を期待してのことだろうが、どうアプローチしてよかったのかが分かりづらかった。具体的な様子（子どもの人数や学年等）も示してあると話しやすかったのではと考える。
- 4年生になり、あまり話したことの少ない1年生も多い中でどんな感じで進むのかなと少し不安だった。でも、みんながいろんな思いを持っていて、それを一生懸命に伝えようとする姿が見られてうれしかったし、もっといろんな話がしてみたいと思える分科会だった。
- エピソード集をもっと早い段階で出しても良かったのかなと感じた。初めの話（子ども目線、学生目線）についてはエピソード集の中でも話せた内容だったし、むしろ後半の話のほうが面白い大事なのかなという印象を受けた。今後は、テーマ決めの精選と具体例が的を射たものであ

るかどうかの検討を十分行った上で分科会に臨めると、もっともっといい分科会になるのではないかと思う。

- 目的へのアプローチの仕方が難しかったと思うけど、その迷いが残ったままだったように感じる。だから、みんなもどうすればいいのかもわからないで、何を話すのか手探りのまま話し合いが進んでいったと思う。しかし、メイフレの現状について、みんなが疑問を持つ良いきっかけになったと思うので、これからどうつなげていくかを考えるのが大切だと思う。
- 分科会が今何をやっているのか、テーマはどうするか等、こまめに全体に出していると良かったと思う。
- 自分自身「子ども理解」というテーマの理解が難しかった。「子ども理解」が深まったのか、深い議論になったのかわからない。もう少し早いテーマ設定、目的設定等が出来ていればと思った。
- 「学生自主企画」でも、学生が企画したからといって学生内での優先順位はかわらないので、学生は強制参加でいいと思う。
- 直前での変更など、慌ただしい分科会ではあったが、最後まで頑張っていた。
- 「子ども理解を深めよう」ということで、どこまで話が広がってもいいということだったので、議長の方が大変だったと思う。その代わりに、みんなの気になっていること一つ一つ話し合うことが出来たのでよかった。特に1年生がしっかり話し合いに入ってくれたことがうれしかった。
- 最後の分科会として、とても有意義な時間になった。
- 今回の分科会では、4年生として新たに学ぶことはなかった。しかし、意見を出し合うことで、1年生が考えてくれたり気付いたりしてくれたので、その点はよかった。
- みんなで答えを出し合って考えるというよりは、自分の中で答えがすでに見つかっていて、それをみんなに発表するみたいと感じた。自分としては、もっと深い点で、1～4年生全員で話し合えるテーマにしてほしかった。
- 1年生にとって、分科会が楽しかったのかどうかを知りたい。
- 今回の分科会は、テーマ設定、話し合いの形式等、すべてがかみ合わず、司会の負担が大きいものだった。来年以降の分科会には、複数の4年生の関与があることを期待する。

Ⅲ. フレンドシップ事業のまとめと課題

メイフレ自己ベストの更新

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 中山玄三

バンクーバー五輪で韓国のキム・ヨナ選手が女子フィギュアの世界最高得点をマークした数日後のことでした。熊本大学フレンドシップ事業シンポジウムでメイフレの学生がこれまでの自己ベストを確かに更新できたと実感しました。平成21年度における5つの班活動について学生が報告するそれぞれの体験内容には目を見張るものがあり、特に、次の5つの点を総合すると、平成12年度からスタートしたメイフレ自己ベストを確かに更新したと高く評価できました。

- ① 学校や家庭で経験できないような機会を子どもに提供したいという「学生の思い」
- ② 子どもに…してもらいたい（子どもが主役）あるいは、子どもが自ら…する（子どもが主体）という「子ども中心の活動の目的・目標」
- ③ 子どもの笑顔、強さ、発想力の豊かさ、言葉や行動、望ましい姿への変容の様子、成長などを嬉しく感じるという「子どもからの反応を温かく受け止める学生の感性」
- ④ 子どもとじっくりと向き合いことで、学生が予想していた子どもの姿と実際の活動の中での子どもの姿が一致したりズレたりする場合があることに気づき、「子どもの具体的な姿（エピソード）をもとに活動を振り返ること」と「子ども目線から活動を企画すること」
- ⑤ 子どもが成長すると同時に学生も子どもと共に成長していくこと、また、学生どうしが支え合って共に成長していくという「学生自身の成長」

熊本市内公民館の社会教育主事の先生方からは、子どもの中には、他の活動や次年度の活動に繰り返し参加したいというリピーターがいるということが、メイフレの学生の思い、子ども目線からの企画、子どもとじっくりと向き合う姿勢が子どもの心に伝わっている確かな証拠であると、確証をいただきました。勿論、これで完璧なものとは言えず、来年度に向けての課題が残されていることも、学生自身が自覚できているように思えました。子どもの興味・関心等に応じたかわり方の工夫など、残されたいくつかの課題解決に向けて、来年度も更に一層、メイフレ活動が質的に充実していくことを願っています。

平成21年度フレンドシップ事業公開シンポジウムに参加して — 進化したフレンドシップ活動 —

教育学部附属教育実践総合センター 高原 朗 子

3月1日、フレンドシップシンポジウムにて学生の報告および熊本県や市の公民館、教育委員会、県生涯学習担当の先生方による講評、熊本県社会教育課小野課長による特別講演を聞きました。副題に「進化したフレンドシップ活動」と書きましたが、今年は例年にまして自分たちの目的、子どもたちのためになることなどを明らかにして活動を計画し、遂行しているその過程がよく分かりました。

先日、私はある心理関係の学会に参加したのですが、そこでの講演で「未熟な臨床家はとにかく何か（治療など）やって、その結果から目的を考えることも多いが、ベテランの臨床家になってくると目的を明確にし、結果もその様になることが多い」という話がありました。今年のシンポジウムでは「とにかくやってみた」の段階から「目的を考えやってみた」の段階に移っていることが感じられる報告が多かったように思います。上記心理臨床家の話にも通じるレベルアップが図られていたことに学生達の成長を感じました。

内容についても工夫がなされ、一つのテーマについて様々な活動を組み合わせるといった形式が多かったようです。発表を聞いていると（多分学生が生き生きと発表したからでしょう）、活動の過程で頑張り、喜んでいる子どもたちの様子が想像できました。これは「僕たち（＝学生）がとにかく頑張った」という自己実現的な段階から、「子どもが楽しめるように工夫した」という他者のことを配慮した段階に進んだからこそだと思います。そのことはある先生がおっしゃった「またやりたいという子どもがいる」という言葉からも裏付けられます。

これも今までの先輩による活動の歴史と知恵の伝達に寄るところが大きいと思います。来年度もフレンドシップ活動が益々進化し、子どもたちへの良い刺激になることを祈っています。

瑠璃の光も磨きから

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 馬場 啓夫

毎月のふり返り会では、これまでの反省を共有し、それを基にして次の活動を改善し、よりよい活動計画を立てるのに役立つている。年度末の「フレンズシップ事業シンポジウム」は、このフレンズシップ事業を通して得た子ども理解とともに様々なことを感じ取った成果の発表会でもあり、私は、毎年この「フレンズシップ事業シンポジウム」から、学生の経験と感性を聴くのを楽しみにしてきました。今年度で定年退職する私にとっては最後になりました。今年も皆さんの生き生きとした取組に感動する場面が沢山ありました。

さて、教育現場を経験した先輩として一言思いを申し上げたいと思います。まずは、皆さんに専門的知識を持つ有能な教師を目指してほしいと思います。ここでいう専門的知識とは、単に教科の知識や指導力だけでなく、学校での様々な教育活動を行ううえで必要な知識、それを生かすことのできる能力や行動力も含めてのことです。特に教員の世界では、幅広い分野にわたって仕事のできる先生が求められます。

学校という職場では、お互いが助け合ったりチームワークや周りの先生方との連携が不可欠です。そして「子どもや学校をよくするには」という建設的な視点での発言や取組が大切です。

教師は一般的に「世間知らずだ」などと言われていきます。多くの教師は、保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学で勉強し生活してきました。そして教師としての職場が学校です。従って、学校社会しか経験がありません。皆さんは、教師としてと言う前に、まず人間として社会の常識やマナーを身に付けた立派な社会人を目指して欲しいと思います。(毎月のふり返り会で少し紹介しました)

教育基本法第1条(教育の目的)は「教育は、人格の完成を目指し…」とあります。子どもたちの教育に携わる教師は身近な大人としてモデルです。教師自ら人格の完成を目指して常に努力する人でありたいものです。人格・品格を磨くには、自分の教養や学問を磨くこと、社会常識やマナーを身に付けることも必要です。また、相手の立場を理解し合う「寛容」・「寛大さ」の心、人間として相手を思いやる心、感謝の心などの心を磨くことも大切なことだと思います。メイクフレンズの皆さんには出来る。大いに期待したい。諺にある「瑠璃の光も磨きから」ですよ。